

夏目漱石『坊っちゃん』論

―対立と受容の構造における坊っちゃん像についての考察―

G 一七一一 劉玲

目次

序章

第一章 先行研究の整理

第二章 タイトル『坊っちゃん』の意味

- 第一節 未熟者としての「坊っちゃん」
- 第二節 愛称としての「坊っちゃん」

第三章 坊っちゃん像

- 第一節 坊っちゃん性格
- 第二節 坊っちゃんの教師としての有り様
- 第三節 坊っちゃんの孤独感

第四章 坊っちゃんと他の登場人物との対立関係

- 第一節 坊っちゃんと家族との対立
- 第二節 坊っちゃんと生徒との対立
- 第三節 坊っちゃんと教員との対立

第五章 清における坊っちゃんの受容

- 第一節 清という存在
- 第二節 清に対する坊っちゃん心情の変化
- 第三節 清における受容という有り様

終章

注

参考文献目録

45	44	43	41	39	39	39	33	31	29	29	24	15	12	12	9	5	5	2	1
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	---

## 序章

夏目漱石は日本近代文学の代表的な作家である。日本ではその名を知らない人がいないと言えるほど日本近代で最も有名な国民的作家である。そして、短い創作期間中に数多くの作品を残した。『坊っちゃん』は一番愛読された作品の一つである。

『坊っちゃん』は夏目漱石が一九〇六年に文芸雑誌『ホトトギス』に発表した小説で、漱石が三十九歳の時の作品である。そして、夏目漱石の一九〇五年四月から一年ほど赴任していた松山中学校に勤務した経験をもとに、「親譲りの無鉄砲」な青年教師の姿が描かれている。主人公の坊っちゃんは東京生まれの東京育ちで、親に可愛がられることなく、女中の清だけに愛されてきた「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりして」いる江戸っ子気質である。「無鉄砲」な坊っちゃんは東京の物理学校を卒業してすぐ四国の中学校の教師になって四国の田舎へ赴任した。生徒の悪行の数々や教員同士の人間関係などに真面目に向き合っていく。そして、山嵐と一緒に赤シャツらと戦ったが、結局辞表をたたきつけて、そこを去ってしまった。人物描写が滑稽で、義理人情ありの勧善懲悪の物語として、夏目漱石の作品の中で、特に人々に愛されてきた。

一八九五年七月十三日、二十八歳の夏目漱石は松山中学の英語教師として赴任した。漱石の俸給は校長よりも高く、月給八十円という破格の待遇であった。松山はのちに『坊っちゃん』の舞台となる。

「坊っちゃん」の作者漱石その人、神経症で胃痛持ち、酒乱。日本文化の時代の変革に抗うに、また神経症の治療めいた活動として、家に集まる若者たちをモデルに「坊っちゃん」を執筆する。(注1)

それ故、漱石には『坊っちゃん』という作品の背景、また坊っちゃんという人物によって、自分の心の寂しさを表し、当時の社会の不正を批判しようという情熱がこめられている。漱石は、いわゆる文明開化・日本近代化の明治時代という、目まぐるしい変動の時代を生きた人である。漱石は、その時代の影響を正面から受け、その半措定としての有り様が見事に『坊っちゃん』に結実されていると思われる。そして、『坊っちゃん』の中で意識的に坊っちゃんという正直で正義感に溢れ、安易に時代に流されない「よき日本人」を創作したのである。

## 第一章 先行研究の整理

まず、平岡敏夫氏の「『坊っちゃん』試論—小日向の養源寺」（注2）は、綿密な作品分析によって後の研究者に多大の影響を与えることになった作品論である。論文の中では平岡氏は教師としての坊っちゃんについて論を展開した。平岡氏は教師である坊っちゃんの生徒との関係性に着目し、坊っちゃんは生徒との間の連帯を敢えて断ち切ることで中学生批判をより痛烈なものとしてしていると指摘した。また論文の中には「坊っちゃんは死んだ」ということ、「他の教師とはむろん中学生ともつながりえなかった坊っちゃんの問題など、多様な論点にわたって論が展開されている。中でも重要なのは清の問題である。早くから清にまつわる死のイメージ、そして、墓の中で坊っちゃんを待つという「異様な言葉」から、清は「坊っちゃんの妻の場所を占めるべく死んだ」とされる。作品の中心は清の死による「深い哀切感」であると指摘している。この論文は、登場人物を配置する勸善懲惡的図式が「佐幕派士族」対「立身出世コースにある俗物」の対立式であることなど、多くの論点を含んでいる。

次に、中島国彦氏は「坊っちゃんの「性分」、『坊っちゃん』の性格——一人称の機能をめぐって—」（注3）においても、坊っちゃんの一人称の語りが読者に機能して主人公の性格が生み出されるのであり、「一人称の形式こそ、それを根本から支えるものとなっている」として、作品が一人称の語りをとる意義を述べている。また、中島氏は「親譲りの無鉄砲」といった坊っちゃんの性格について言及した。そこで、中島氏は「親譲りの無鉄砲」さはあくまで坊っちゃんの性格の外側からの説明や規定に過ぎず、作品世界に生きる主人公への把握から生じたものとは言えないとする。

そして、有光隆司氏は「『坊っちゃん』の構造——悲劇の方法について」に、坊っちゃんは、全世界を善と悪とに識別しようとするのだが、その価値基準が彼の性格そのものによっているため、識別の妥当性は直観的、非論理的で、客観性が欠けると述べている。有光氏は以下のように考えている。

『坊っちゃん』という作品は、その深部において悲劇として読まれることを望んでいるのである。その際、「無鉄砲」さゆえに就職し、またその「無鉄砲」さゆえに辞職することで、四国の中学校を素通りして東京に舞い戻る男の喜劇としての「物語」は、それ自体独立した一つの完結世界をめざしながらも、ここでいわば、悲劇のための有効な方法として機能しているわけである。あるいは『坊っちゃん』とは、喜劇を演じる男の向こう側に、悲劇役者たちの世界が透けて見える、そのような仕掛けを内包した作品なのだ、といってもよからう。（注4）

有光氏は主人公坊っちゃんの人生が始めから最後まで悲劇的であることを述べているが、

坊っちゃんの悲劇を詳細には論じていない。

さらに、小森陽一氏は『坊っちゃん』の作品の構造を「語り」によって生まれる二項対立的な「裏表の世界」（注5）にあることを示して、それ以降、研究は『坊っちゃん』のテクスト的特徴に関心が向けられるようになった。テクスト的特徴に関する研究は内的構造と外的構造に分けられるが、文学面では作品に組み込まれた外的構造に関して、作品の舞台となった明治時期の歴史的背景や出来事との関係を、テクストに反映された明治時期の記号として読み取っている。前の先行論に触れたが、平岡氏は清の坊っちゃんに対する感情が異性への感情であることを指摘したが、小森氏は清の存在の意味について論じた。小森氏は清の存在が「おれ」の変化する姿を解読する重要な枠組みとして指摘している。更に、「おれ」は清の思考に影響を受けることになり、「おれ」にとって、清の存在は「おれ」の変貌の過程に関わっているとも述べている。そして、「おれ」の無意識な清への回帰願望から、意識的なそれへの転換の過程は、同時に「おれ」が無意識のうちに「裏表のある奴」の世界に変化させられていく過程でもあったと指摘している。

最後に、斉藤英雄氏は「『坊っちゃん』の世界―「譚」の内実」において、「マドンナ事件」について論じている（注6）。「マドンナ事件」から重要な視点を引き出している。それはマドンナのうらなりから赤シャツへの心移りという私的行為から、公的な教育の場である学校に身をおく山嵐と赤シャツの対立という事態が生み出されてきたことである点だ。師範学校の生徒と中学校の生徒の「喧嘩事件」で、山嵐が辞表の提出を余儀なくされた際、自分にもさせたらよいと言う坊っちゃんに向かって、山嵐は自分が赤シャツとは今まで到底共存しえない存在だが、坊っちゃんの方は今の通りいても害にならないと思っている。ここで明らかになったのは、坊っちゃんと山嵐の赤シャツとの対立であった。このような論展開において、斉藤氏は「私的」と「公的」の側面において論じている。

本稿においては、平岡氏はその「対立」の形成した理由について十分には論じていなかったことから、作者が描き出す「対立」の構図をより詳しく分析しようと考えている。例えば、主人公の坊っちゃんは、子供時代には、父母に愛されなかったため、父母との対立、学生時代には、家屋敷の相続での兄との対立、四国の田舎中学校に赴任した際には、生徒たちとの対立、同僚の教員との対立、さらに校長や教頭など、周りの人間とことごとく対立しており、その対立の意識を形成する理由を明らかにしていきたい。また、清は坊っちゃんにとってどのような存在であろうか。作品の中の女中の清、つまり小説の中に描写された清像について分析を展開し、清の坊っちゃんに対する重要さを考察したい。

また『坊っちゃん』という作品を坊っちゃんの悲劇を中心に読む見方に対し、坊っちゃんの人生はこの物語の中で悲劇であることを反論するとともに、タイトルの『坊っちゃん』の二つの意味を考察することを通して、坊っちゃんの運命は完全な（悲劇）ではないことを明らかにしたいと思う。

そして、平岡氏の清のことに関する論を踏まえ、坊っちゃんの清に対する心情の変化を考察していく。清の坊っちゃんに対する受容から窺える彼女の坊っちゃんへの母性的な感

情を考察するとともに、主人公坊っちゃんの清に対する感情の変化を通して、清における坊っちゃんの受容は坊っちゃんの人生において、かけがえのないものであることを分析していく。まず、タイトルの『坊っちゃん』の意味から考察を行なう。

## 第二章 タイトル『坊っちゃん』の意味

タイトルの『坊っちゃん』には二つの意味が込められている。まず、坊っちゃんの未熟者としての面について考察していく。

### 第一節 未熟者としての「坊っちゃん」

東京の物理学校を卒業した坊っちゃんは松山の中学校へ教師として赴任している。その学校で卑劣な先輩教師が彼を待ち受けている。赤シャツと野だはその卑劣な先輩教師の代表者であると言えよう。和田康一郎氏の「「天誅」の成功―「坊っちゃん」論考のための覚書」は、「天誅」の意味について「「天誅」の場面を作品全体の流れ」において「新たに位置付け」（注7）を考え直すことを目的とする論文である。なかでも「バツタ事件、呐喊事件」「ならびに後の山嵐の対応」が、「後の「天誅」への重要な伏線になっている」としている。また、赤シャツが二人を訴えなかったことについては、もうすこし秘められた意味が存在すると指摘した。和田氏の観点から見ると、赤シャツの行動また彼の人性は容易に理解できないことが窺える。教職に就いてまもなく、赤シャツと野だが坊っちゃんを誘って、一緒に釣りに行く場面がある。

君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。（中略）赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極まって居るんだから、今更驚きもしないが、二人で行けば済む所を、なんで無愛想のおれへ口を掛けたんだらう。大方高慢ちきな釣道楽で、自分の釣る所をおれに見せびらかす積かなんかで誘ったに違いない。（『漱石全集』第五章）

赤シャツは教頭であり、坊っちゃんの上司である。上司の赤シャツが部下の坊っちゃんを誘う目的は何かと言えば、他郷から来た部下と友好を深めるためかもしれないが、その一方で、坊っちゃんを自らの味方へと引き込むための可能性も高いと思われる。しかし、単純な坊っちゃんは〈親愛の情〉が深い教頭の招きについて、赤シャツが彼の前で自分の腕を見せるためだと思っているだけなのである。実際に、その考えを持っている坊っちゃんは彼らと一緒に釣りに行っている。

すると二人は小声で何か話し始めた。おれにはよく聞こえない、又聞きたくもない。（中略）何だか二人がくすくす笑ひ出した。笑い声の間に何か云ふが途切れ途切れで頓と要領を得ない。（中略）言葉は斯様に途切れ途切れであるけれども、バツタだの、団子だのと云ふ所を以って推し測って見ると、何でもおれのことについて内緒話をしているに相違ない。話すならもっと大きな声で話すがいい、又内緒話をする位なら、おれなんか誘はなけばいい。（『漱石全集』第五章）

赤シャツと野だは「重要な部分」に「力を入れて」坊っちゃんの注意を引こうとしている。彼らは坊っちゃんを山嵐に対して悪感情を抱くようにしている。赤シャツと野だの二人の行為は悪意を持った者としてとらえることができる。また、二人は坊っちゃんと以下の会話を展開している。

「然し君注意しないと、剣呑ですよ」と赤シャツが云ふから「どうせ剣呑です。かうなりや剣呑は覚悟です」と云ってやった。実際おれは免職になるか、寄宿生を悉くあやまらせるか、どっちか一つにする了見で居た。「さう云っちゃ困る」「教頭は全く君に好意を持ってるんですよ。僕も及ばずながら、同じ江戸っ子だから、可成長く御在校を願って、御互に力にならうと思つて、是でも陰ながら尽力して居るんですよ」と野だが人間並の事を云つた。（『漱石全集』第五章）

野だの話から分析すれば、彼らは坊っちゃんと「御互に力にならう」と思っている。すなわち、赤シャツと野だは、坊っちゃんを味方に引き込む意識を持っている。彼らははじめから、坊っちゃんを誘つて釣りに行く動機が坊っちゃんの考えとは違っている。それから、事態は以下のように進む。

「そこには色々な事情があつてね。君も腹の立つ事もあるだらうが、ここが我慢だと思つて、辛防してくれ玉へ。決して君の為にならない様な事はしないから」

「色々の事情だ、どんな事情です」

「夫が少し込み入ってるんだが、まあ段々分かりますよ。僕が話さないでも自然と分つて来るです、ね吉川君」

「ええ中々込み入ってますからね。一朝一夕にや到底分かりません。然し段々分かります、僕が話さないでも自然と分かつて来るです」と野だは赤シャツと同じ様な事を云ふ。

「そんな面倒な事情なら聞かなくてもいいんですが、あなたの方から話し出したから伺ふんです。」

「そりや御尤だ。こつちで口を切つて、あとをつけないのは無責任ですね。夫れぢや是丈の事を云つて置きませう。あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師は始めての、経験である。所が学校と云ふものは中々情実のあるもので、さう書生流に淡泊には行かないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」



「さあ君はさう率直だから、まだ経験に乏しいと云ふんですがね」（『漱石全集』 第五章）

以上の会話内容から見ると、赤シャツと野達は坊っちゃんに「色々な事情」を聞かせたため、彼らは故意に坊っちゃんから質問をさせようとしている。しかしながら、単純な坊っちゃんは、これは「面倒な事情」で「聞かなくてもいい」と言っている。赤シャツはその状況の下で、「こつちで口を切つてあとをつけないのは無責任」と言うように「色々な事情」について説明している。彼らの目には、「情実のある」学校で、「書生流」の坊っちゃんはまだ「経験に乏しい」のである。また、赤シャツは坊っちゃんに対して、以下の話をしている。

「僕の前任者が、誰れに乗せられたんです」

「だれと指すと、其人の名譽に關係するから云へない。又判然と証拠のない事だから云ふと此方の落度になる。とにかく、折角君が来たもんだから、ここで失敗しちや僕等も君を呼んだ甲斐がない、どうか氣を付けてくれ玉へ」

「氣をつけたって、是より氣の付け様はありません。わるい事をしなけりや好いんでせう」

赤シャツがホホホと笑った。（中略）赤シャツがホホホと笑ったのは、おれの単純なのを笑ったのだ。（『漱石全集』 第五章）

赤シャツは坊っちゃんの面前で自分の「前任者」について言及している。しかし、その「前任者」が「誰に乗せられた」のかということについては、具体的な説明をしないのである。彼の意図は何かと言えば、坊っちゃんを「情実のある」学校において彼以外の教師を疑うことによつて警戒心を抱かせたいのである。赤シャツは表面的には学校で失敗させない目的で坊っちゃんを誘っているが、実際には、「経験に乏しい」坊っちゃんを利用しようとしているのである。単純な坊っちゃんは赤シャツらの挑発にのり、噂を信じることによつて、山嵐と喧嘩をすることになる。しかし赤シャツは以下のように坊っちゃんに言っている。

すると赤シャツは山嵐の机の上へ肱を突いて、あの盤台面をおれの鼻の側面へ持つて来たから、何をするかと思つたら、君昨日帰りがけに船の中で話した事は、秘密にしてくれ玉へ。まだ誰にも話しゃしますまいねと云った。（中略）おれは教頭に向つて、まだ誰にも話さないが、是から山嵐と談判する積だと云つたら、赤シャツは大に狼狽して、君そんな無法な事をしちや困る。僕は堀田君の事に就いて、別段君に何も明言した覚えはないんだから―君がもし茲で乱暴を働いてくれると、僕は非常に迷惑する。

君は学校に騒動を起こす積りで来たんだやなからうと妙に常識をはづれた質問をするから、當り前です、月給をもらったり、騒動を起したりしちゃ、学校の方で困るでせうと云った。すると赤シャツはそれじゃ昨日の事は君の参考丈にとめて、口外してくれるなと汗をかいて依頼に及ぶから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしませうと受け合った。君大丈夫かいと赤シャツは念を押した。（『漱石全集』第六章）

以上の会話から分析すれば、赤シャツは坊っちゃんの〈行動〉について、非常に心配している。彼に心配させたのは、学校の「騒動」ではなく、彼と山嵐の「騒動」であると言えよう。赤シャツは、彼が〈坊っちゃんの背後で挑発すること〉について、山嵐に知らせるのを心配している。今の坊っちゃんの行為は、赤シャツの目からすると、「乱暴」で未熟な行為であると思われる。また、生徒たちのいたずら行為の処置について、教員の全体が会議をしている。赤シャツはその事件について、以下のように、自分の見解を述べている。

私も寄宿生の乱暴を聞いて甚だ教頭として不行届であり、且つ平常の徳化が少年に及ばなかったのを深く恥づるのであります。でかう云ふ事は、何か陥欠があると起るもので、事件其物を見ると何だか生徒丈がわるい様であるが、其真相を極めると責任は却って学校にあるかも知れない。だから表面上にあらはれた所丈で嚴重な制裁を加へるのは、却って未来の為によくないかとも思はれます。（『漱石全集』第六章）

赤シャツは先に述べたように、坊っちゃんに学校で「失敗」してほしくないが、今の〈見解〉では、「責任は却って学校にある」のである。赤シャツの言外の意を考えて見ると、生徒たちのいたずらは教師の坊っちゃんのせいなのであろう。なぜ就任したばかりの坊っちゃんを味方に引き込もうとした一方で、今は坊っちゃんを敵にまわそうとしているのか。赤シャツの態度の変化は、坊っちゃんの山嵐に対する行動が、あまりにも性急であることを認識したゆえのことであるのかもしれない。

坊っちゃんと山嵐は手を組み、彼らは赤シャツと野だを処罰する共通の目標を持っている。今では、山嵐の目に映る坊っちゃんは、策略が苦手なのに、正義感にあふれる人間である。二人は互いに頼りになるまでに共に奮闘している。その後、二人は「枅谷の表二階」へ「潜んで」、障子へ穴を開けて、赤シャツと野だを待っている。「枅谷」での八日目は、赤シャツと野だはついに現れている。

「もう大丈夫ですね。邪魔ものは追っ払ったから」正しく野だの声である。「強がる

許りで策がないから、仕様がなない」是は赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似て居ますね。あのべらんめえと来たら、勇み肌の坊っちゃんだから愛嬌がありますよ」「増給がいやだの辞表が出したいのって、ありやどうしても神経に異状があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思ふ様打ちのめして遣らうと思ったが、やつとの事で辛抱した。二人はハハハハと笑ひながら、瓦斯燈の下を潜って、角屋の中へ這入った。（『漱石全集』 第十一章）

赤シャツと野だの会話内容から見ると、「べらんめえ口調」に似ている「男」は坊っちゃんである。前は坊っちゃんが学校の増給を断ったことと辞表を出すことが、赤シャツの心においては「神経に異状があるに相違ない」と思わせていた。「神経に異状がある」坊っちゃんは野だの目で「べらんめえ」であるが、「勇み肌の坊っちゃん」で、「愛嬌」があると思っている。今までの二人の会話内容から考えると、赤シャツらの以前の坊っちゃんに対する優しさはすべて表面的で、虚偽的なものであると解せる。

ここまで、赤シャツと野だの目による坊っちゃんとは社会経験が乏しい「べらんめえ」であることを明らかにしてきた。彼の衝動的な行為は未熟で、青二才のような存在であると推測できる。以上のことをまとめると、タイトルの『坊っちゃん』の一つ目の意味は、未熟者としての坊っちゃんであると言える。

## 第二節 愛称としての「坊っちゃん」

清水美知子氏は「夏目漱石の小説にみる女中像：『我輩は猫である』『坊っちゃん』を中心に」において、「主人公・坊っちゃんと下女・清の関係は、近代的な雇用関係ではなく、封建的な主従関係である」（注8）と指摘した。また「『坊っちゃん』に描かれた温情的な主従関係は、明治末の日本においては、「美風」としてとらえられたのである」と述べている。では「主」としての坊っちゃんと「従」としての清の間にどのような「温情的」なことが発生したのか。「従」としての清の存在は坊っちゃんにとってどのような意義があるのか。また下女の清の存在はタイトルについて、どのような関わりがあるのか。本節では、この問題について分析していく。

後の章で詳細を触れるが、坊っちゃんは親に甘えることができなかったし、また甘えようともしない子供であった。しかしながら、このような彼に清は異常なほどの愛情を傾けている。本文においては、清は「あなたは真つ直ぐでよい御気性だ」と時々坊っちゃんを褒めている。

また、坊っちゃんが清を訪ねた時、清は坊っちゃんから彼が田舎へ行くという知らせを聞いて、「非常に失望した容子」を見せている。清の様子は、彼女が坊っちゃんと離れた

くないのを表している。坊っちゃん清の目から見ると、仕えるべき大切な存在であろう。

車へ乗り込んだおれの顔を昵と見て「もうお別れになるかも知れません。随分御機嫌やう」と小さな声で云った。目に涙が一杯たまつて居る。おれは泣かなかった。然しもう少しで泣く所であつた。汽車が余つ程動き出してから、もう大丈夫だらうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、矢つ張り立つて居る。何だか大変小さく見えた。（『漱石全集』 第一章）

清は坊っちゃんと離れる時に、長い時間立ち去ることが出来なかつたのである。坊っちゃん「振り向いたら」清が「大変小さく見えた」と語っている。この「小さく」は坊っちゃんの視線だけでなく、清の方もそうである。これは空間的な「小」だけでなく、精神的な面で特別な感情も含まれていると思われる。坊っちゃんは清にとって、かけがえのない存在であると言えよう。清の目には、坊っちゃんは良い気性で、善良な人であるが、「竹を割った」ような性格で一人で他郷へ行けば、清は彼が損をしてしまうのを心配している。この点から見ると、清は坊っちゃんに対して、母が他郷にいる息子を心配しているようである。また、清は坊っちゃんに長い手紙を書き、その中で、坊っちゃんに対して慎重に行動するように助言をしている。

取り上げて見ると清からの便りだ。（中略）。成程読みにくい。（中略）坊っちゃんは竹を割った様な気性だが、只癩癩が強過ぎてそれが心配になる。――ほかの人に無闇に渾名なんか、つけるのは人に恨まれるものになるから、矢鱈に使っちゃいけない、もしつけたら、清丈に手紙で知らせろ。――田舎者は人がわるいさうだから、気をつけてひどい目に遭はない様にしろ。――氣候だつて東京より不順に極つてゐるから、寝冷をして風邪を引いてはいけない。（中略）なるべく儉約して、萬一の時に差し支へない様にしなくっちゃいけない。（『漱石全集』 第七章）

清からの手紙には、細かいことまでも一つずつ坊っちゃんに注意を促す言葉がある。「癩癩が強すぎて」それが「心配になる」と辛抱することの必要性を伝えている。その文章は、清の坊っちゃんに対する関心と心配を表現している。彼女には、他郷にいる坊っちゃんが相変わらず真つ直ぐな性格で、同僚との付き合いに対して心配している。清は母のように、自分の想像によって、坊っちゃんが生活の瑣事を処理することもできなさそうであると考えている。作品の始めに、清だけが坊っちゃんを可愛がることが語られている。すなわち、

清は坊っちゃんの唯一の理解者として語られる。そして終わりに、坊っちゃんは「清の事を話すのを忘れていた」と、清が死んでしまったことについて、以下のように語っている。

死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待つて居りますと云った。

（『漱石全集』 第十一章）

以上のように、清の墓が小日向の養源寺にあることを語って、これが作品の結びとなっている。また、作品の全体から見ると、坊っちゃんの面前で優しく「坊っちゃん」と呼ぶ人は清一人しかいない。今の「坊っちゃん」は野だと言う「坊っちゃん」とは全く違っていると思われる。清が言う「坊っちゃん」は「真っ直ぐな」「坊っちゃん」である。母のような愛情を込めている愛称としての「坊っちゃん」でもあると考えられる。総括的に言うと、「坊っちゃん」は世事に精通している赤シャツらの側から見ると、未熟者であり、青二才のような存在である。しかし、坊っちゃんを（生涯の頼み）とする清の側から見ると、「坊っちゃん」は、清の愛情を込める愛称であることが明らかとなった。

### 第三章 坊っちゃん像

坊っちゃんが読者に与える最も印象深い点は、おそらく彼のいわゆる江戸っ子気質であろう。西山松之助氏の『江戸っ子』によれば、江戸っ子は、常に「お膝下生まれ」という誇りを持っており、「宵越しの金は持たない」という金銭感覚を持っている。そのほか、「向こう見ずの強がり」と喧嘩早い」などの特徴がある。そして、江戸っ子気質は結局優越感と抵抗精神の二つに集約されるという（注9）。すなわち、富貴や権勢に対する抵抗精神を持っている一方、地方出身の人々を軽蔑し、優越感を持っている。また、性格の面で言えば、強がりでもある。夏目漱石は、坊っちゃんの一連の行動描写を通して、江戸っ子坊っちゃんの単純明快な性格を表現している。

#### 第一節 坊っちゃんの性格

『坊っちゃん』の冒頭に、「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている」「小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある」というあまりに有名な箇所がある。坊っちゃんがそんなことをする理由は以下の語りのように極めて簡単である。

新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降る事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。（『漱石全集』 第一章）

坊っちゃんは同級生の「冗談」で、何も考えずに行動して二階から飛び降りるのは、彼の単純すぎる性格を表現している。また、漱石はこの短い書き出しを通して、坊っちゃんの「無鉄砲」さを鮮明に描き出している。

小説の書き出しの後に、すぐナイフで自分の親指を切る失敗談がある。坊っちゃんは親類からもらったナイフを友達に見せたら、友達は「光る事は光るが切れそうもない」と言ったため、坊っちゃんは自分の親指を切った。

切れぬ事があるか、何でも切って見せると受け合った。そんなら君の指を切って見ると注文したから、何だ指位この通りだと右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。

（『漱石全集』 第一章）

ここから見ると、坊っちゃんは単純すぎる性格で、どんなことがあっても、深く考慮せず行動し、いつも「損ばかり」している。が、「損ばかり」することになったのは自分自身が原因であろう。

また、続いて述べられるエピソードには、勘太郎が坊っちゃんにとって「命より大事な栗」を「盗みに来た」という山城屋の勘太郎との喧嘩がある。

ある日の夕方折戸の陰に隠れて、とうとう勘太郎を捕まへてやった。其時勘太郎は逃げ路を失って、一生懸命に飛びかかって来た。(中略)勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ真逆様に落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袴の片袖がもげて、急に手が自由になった。其晩母が山城屋に詫びに行った序でに袴の片袖も取り返して来た。(『漱石全集』 第一章)

まだ子供である勘太郎と坊っちゃんは、栗を盗むことで喧嘩し、殴り合いをした。坊っちゃんの目に「弱虫」の勘太郎は自分の〈利益〉を侵している。坊っちゃんの一連の動作から見ると、彼は自身にとって「命より大切」なものを守るため、力を尽くして勘太郎と戦っている。子供の間にそのような激しい殴り合いは珍しくないが、坊っちゃんの無鉄砲さを鮮明に表した場面であると考えられる。

また、坊っちゃんは台所で肋骨を打った際に、母を怒鳴らせた。その後、母が急に亡くなったことは、坊っちゃんにおいて後悔を生むことになった。

母が大層怒って、お前の様なものの顔は見たくないと云うから、親類へ泊まりに行っていた。するととうとう死んだと云う報知が来た。そう早く死ぬとは思はなかった。

#### (『漱石全集』 第一章)

そして、兄が坊っちゃんを「親不孝」で、彼のせいで「おっかさんが早く死んだ」と言ったため、坊っちゃんは兄を打ったのである。また、「卑怯な待ち駒をして人が困ると嬉しそうに冷やした」兄に将棋の駒をぶつけたこともあった。

また、山嵐は、坊っちゃんの性格の特徴を「負け惜しみの強い男だ」と明言している。坊っちゃんが教頭の赤シャツに挑発されて、数学主任の山嵐と喧嘩し、かつて氷水を奢ってもらった一銭五厘のお金を返す箇所がある。山嵐がそれを受け取らないので、その一銭五厘のお金がずっと二人の机の間に置いたままになっていた。

この一銭五厘が二人の墙壁になって、おれは話さうと思っても話せない、山嵐は頑として黙ってる。おれと山嵐には一銭五厘が祟った。仕舞には学校へ出て一銭五厘を見るのが苦になった。(『漱石全集』 第八章)

その「一銭五厘」の存在のため、坊っちゃんと山嵐の関係は緊張状態のままにあった。あとで、誤解が解けて、坊っちゃんはその一銭五厘のお金を取って財布の中に入れていた。山嵐に原因を聞かれたら、以下のように言っている。

実は取らう取らうと思つてが、何だか妙だから其儘にして置いた。近来は学校へ来て一銭五厘を見るのが苦になる位いやだったと云つたら、君は余つ程負け惜しみの強い男だと云ふから、君は余つ程剛情張りだと答へてやつた。（『漱石全集』第九章）

この部分を読んでも分かるように、坊っちゃんの負けず嫌いな性格の特徴が鮮明に感じられる。坊っちゃんにとって「苦になった」が、彼は容易に妥協しないのである。

無鉄砲である一方、道徳に関して坊っちゃんはとても強い価値観を持っている。しかし彼は警戒心がなくて世事に疎い。また誠実で嘘をつかず、「人に隠れて得をすることが大嫌い」である。中学校に赴任したばかりの時に、校長の「教育の精神」などの訓戒を聞いて、坊っちゃんは次のように感じている。

校長の云ふ様にはとても出来ない。おれ見た様な無鉄砲なものをつらまへて、生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、学問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十圓で遙々こんな田舎へくるもんか。（『漱石全集』第二章）

そこで、坊っちゃんは「到底あなたのおっしゃる通りにや、出来ません、この辞令は返します」と校長に言つた。この場面では、坊っちゃんは自分が「教育精神」を持って「生徒の模範」になることができないと思つているため、「辞令」を返そうとしている。ここでの坊っちゃんは誠実で、嘘をつかず、世事に疎いと言えよう。そして、初めての宿直の時に生徒たちにいたずらされ、彼らに詰問する中で、罰について話をした。

嘘を吐いて罰を逃げる位なら、初めからいたずらなんかやるものか。いたずらと罰はつきもんだ。罰があるからいたずらも心持ちよく出来る。いたずらで罰は御免蒙るなんて下劣な根性がどこの国に流行ると思つてるんだ。（『漱石全集』第四章）

この場面から見ると、坊っちゃんはとても強い正義感を持っている。坊っちゃんの心で、ミスを犯したら、懲罰を受けなければならないのである。

また、坊っちゃんは山嵐と共謀して、奸物の赤シャツと野だに対して、次のように感じている。

「貴様等は奸物だから、かうやって天誅を加えるんだ。これに懲りて以来つつしむがいい。いくら言葉巧みに弁解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら二人共だまつていた。ことによると、口をきくのが退儀なのかも知れない。（『漱石全集』第十一章）



坊っちゃんとは山嵐と一緒に排除されてから、学校を去る前に、女郎買いをした赤シャツと野だを待って、ひどく二人を殴って、うっ憤を晴らした。そして、二人は赤シャツらの報復を恐れないで、次のように言っている。

「おれは逃げも隠れもせん。今夜五時迄は濱の港屋に居る。用があるなら巡査なりなんなり、よこせ」と山嵐が云ふから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待ってるから警察へ訴へたければ、勝手に訴へろ」と云って、二人してすたすたあるき出した。（『漱石全集』 第十一章）

悪人を殴ってから、逃げも隠れもしないで、懲罰を待つことから見ると、坊っちゃんは正義感を持って、自分のやることに對して責任を負う人である。彼は悪勢力の前で頭を下げない人でもあると言えよう。

また、英語教師の古賀が赤シャツに排除され、学校を去らなければならないと大家の婆さんから聞いて、坊っちゃんは思わずすぐ赤シャツを訪ね、〈理由不明〉の「増給」を断った。

あなたの云ふ事は尤もですが、僕は増給がいやになったんですから、まあ断ります。考えたって同じ事です。さようなら。（『漱石全集』 第八章）

このように、坊っちゃんの本質は善良であるが、軽率で単純すぎると言えよう。

## 第二節 坊っちゃんの教師としての有り様

坊っちゃんは様々な人間性を持っている教員たちに対して、彼らに象徴的な渾名をつけた。教壇に立って間もなく、生徒たちとの間にも大きな問題が起こった。正義感に溢れる坊っちゃんは教師という職業に對して冷淡で、興味がないように見える。本節では、当時の教育現場の状況と坊っちゃんのエドゥカシヨンを明らかにすることによって、坊っちゃんのエドゥカシヨンを考察したい。

明治初期には廃藩置県で俸禄を失った旧士族が警官と教師になることが多かったが、この頃には農民層出身者が教師の多数派を占めるようになっていた。日清戦争後から明治三十年代にかけては、義務教育就学率の急上昇に伴う小学校教員数の増加と、劣悪な待遇によって教員集団の社会的地位が下落している。寺崎昌男氏は、当時の状況について、以下のように述べている。

義務教育就学率の急上昇にともなう小学校教員数の増加、それに占める女教員と農民

層の増加の一方で、劣悪な待遇によって教員集団の社会的地位が下落していったのです。政府は、待遇改善への決定的な対応ができない一方で、教員の政治的活動を規制し、教育内容・方法の画一化を進めて、教員の自由を狭めていきました。これらを受けて、教員たちは内的自発性の成立条件を喪失し、教師としていかに生きるべきか思い悩み、「教師たることへのよりどころ」を求めていきます。しかし、国家としては、大日本帝国の対外膨張に対応して進取敢為の積極的国民を育成するには、教師がただの職業人になってしまうことは避けられるべきことでした。そのなかで、教師は子どもへ献身するために、教室王国の主権者・主宰者として教科書を超え、価値内容を子どもたちに付与する慈恵的姿勢をとることを要求されていきます。このような状況下で、教師の目は、教育界の内へ内へと導かれていきました。（注10）

以上の内容から見ると、当時は、教師の地位が低くなる一方で、教師として、子どもたちのために献身する精神が要求されていたことが分かる。しかし、主人公の坊っちゃんはその当時の教育制度の下で、そのような精神とは異なる考え方をもった存在であった。

#### 1、田舎に対する反感と教育の現場から見る坊っちゃん

坊っちゃんは正直で率直であり、善良な人間とは言えるが、教師の標準から見れば、理想的な人物であるとは言えない。坊っちゃんは物理学校を卒業してから、校長が「呼びに来た」とある。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だらうと思って、出掛けて行ったら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十圓だが、行つてはどうだと云ふ相談である。（『漱石全集』第一章）

師範学校ではない、物理学校で勉強してきた坊っちゃんは、卒業してから、校長に進められ、教師として、四国辺の田舎に赴任することになった。坊っちゃんはその「相談」に対して、以下のように考えている。

おれは三年間学問はしたが実を云ふと教師になる気も、田舎へ行く考へも何もなくつた。尤も教師以外に何をしやうと云ふあてもなかったから、此相談を受けた時、行きませうと即席に返事した。是も親譲りの無鉄砲が祟つたのである。（『漱石全集』第一章）

坊っちゃんは教師になれる知識や経験がなく、「教師になる気」もないが、「相談」を受けたら、「行きませう」と即時に返事をした。ここで、自分の人生に関することに対し

でも深く考慮せずに決めてしまうのは、坊っちゃんの単純さを表している一方で、田舎の生徒への無責任さも表われていると思われる。

松山へ行ってから、田舎の校長に辞令を渡された時、校長から「教育の精神について長いご談義」を聞かされた時、坊っちゃんは校長の「ご談義」について、次のような考えを抱いている。

おれ見た様な無鉄砲なものをつまへて、生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、学問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十圓で遙々こんな田舎へくるもんか。（『漱石全集』 第二章）

坊っちゃんはその「ご談義」の理想的教師像に反感を持っている。校長の訓示は坊っちゃんの目からすると、教師像への美化であり、実践できない内容であると思われる。生徒の模範になり、学問以外の教育者になるのは、自分の性格や信条に合わないのである。したがって、彼はこのような反発感を抱くことになった。そして、教師を断ろうとするがうまくいかない。

おれは嘘をつくのが嫌だから、仕方がない、だまされて来たのだとあきらめて、思ひ切りよく、ここで断って帰っちまはうと思った。宿屋へ五圓やったから財布の中には九圓なにがししかない。九圓ぢや東京迄は帰れない。茶代なんかやらなければよかった。惜しい事をした。（『漱石全集』 第二章）

坊っちゃんはそのようなことはできないからといって辞令を返そうとする。仕事を放り出そうとしている。しかし、今の自分の手持ちの金から考えて、「帰れない」と断念した。そして「この学校が行けなければすぐどこかへいく覚悟」をしている。ここからは教師として、教育のためにつくす意識が全くないことが窺える。教育者としてつとめる意識がないにもかかわらず、なぜ物理学校の校長と「相談」した時、すぐ同意して教師になったのか。簡単に言えば、坊っちゃんは自身の「無鉄砲」さによって、教師になっている。そのため、校長の言うような理想的教師になる情熱を持っていないのである。

坊っちゃんの最初の授業については、次のように描かれている。

愈々学校へ出た。初めて教場へ入って高い所へ乗った時は、何だか変だった。講釈をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思った。（中略）最初の一時間は何だかいい加減にやってしまった。然し別段困った質問も掛けられず済んだ。（『漱石全集』 第三章）

一時間目は「何だかい加減にやってしまった」が、とりあえずは何事もなく済んだ。そして、坊っちゃん「おれでも先生が勤まるのか」と思い、教師としての自信が持てなかったのである。また、坊っちゃんは自身が教師としてまだ不十分であるという考えを持っている。

また、二時間目に向かう際も緊張感はまだ解けなかった。白墨を持って控所を出る時には、まるで「敵地へ乗り込む様な気」がした。坊っちゃんは教師として、身分が生徒より上であるが、なぜ「敵地へ乗り込む様な」気がしているのか。ここには、坊っちゃんの自信の無さとともに、生徒たちへの「虚栄心」が関係していると考えられる。教室に入ってみると、体の大きな生徒ばかりがいることに気づく。

おれは江戸っ子で華奢に小作りに出来て居るから、どうも高い所へ上がっても押しが利かない。喧嘩なら相撲取とでもやって見せるが、こんな大僧を四十人も前へ並べて、只一枚の舌をたたいて恐縮させる手際はない。（『漱石全集』 第三章）

坊っちゃんは背が高い生徒たちを見て、最初に抱いた印象は「喧嘩」又「相撲取」に関するものである。このような印象を抱いたのは生徒たちと「喧嘩」しようとしている彼が教師としての自信を持っていないからである。弱みを見せてはいけないと思って、なるべく大きな声を出して、「少々巻き舌で講釈」した。

そして、坊っちゃんは授業をするとき、「べらんめい調」を用い、「講釈」をした。生徒たちは「煙に捲かれてぼんやり」していたが、坊っちゃんは生徒の状態を見ると「益々得意になって」いる。あまりに早口であったため、一番前に居た生徒は次のように言った。

あまり早くて分らんけれ、もちつと、ゆるゆる遣つて、おくれんかな、もし（『漱石全集』 第三章）

生徒の困惑に対して、坊っちゃんは謝る気がなく、当然であるような口調で以下のように返答した。

おれは江戸っ子だから君等の言葉は使えない。分からなければ、分かるまで待つてるがいいと答へてやった。（『漱石全集』 第三章）

坊っちゃんが田舎の生徒たちに向き合うには「江戸」で対抗するしかない。教師として、生徒たちの立場を考慮せず、態度も親切ではない。坊っちゃんの身構えている様子がよくわかる。また、坊っちゃんは数学の教師であるが、幾何に関する問題は苦手で、生徒の質問に対して「冷汗を流した」とある。

仕方がないから何だか分からない、この次教えてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあと囃した。（『漱石全集』 第三章）

生徒たちの「わあと囃した」という表現は彼らの坊っちゃんに対する嘲笑を表していると思われる。この場面からは、生徒たちが教師としての坊っちゃんの能力の不足に気付いたことが確認できる。このことが、以後の生徒の悪戯をする理由の一つとなった。しかし、坊っちゃんは生徒たちの責めに対して、まったく気にせず、次のように考えている。

笹棒め、先生だって、できないのは当たり前だ。出来ないのを出来ないと言うのに不思議があるもんか。そんなものができるくらいなら四十圓でこんな田舎へ来るもんか。（『漱石全集』 第三章）

坊っちゃんはいつも「こんな田舎」と言い、江戸っ子の口調で田舎に対して軽蔑感を露わにしている。坊っちゃんは四国の中学生に対して冷淡で、軽蔑していると言えよう。ここからは、彼の江戸っ子としての自負が表現されていると考えられる。

坊っちゃんが控所へ帰って来たとき、「今度はどうだ」とまた山嵐が聞いた。坊っちゃんは「うんと云ったが、うんだけでは気が済まなかったから、此学校の生徒は分らずやだな」と云ってやった」とある。自分は幾何の問題が解決できないが、「生徒は分らずやだな」という結論を出している。

そして、坊っちゃんは天麩羅を食べに行ったことが学校の生徒たちに知られることになった。生徒たちはそのことについて、坊っちゃんを嘲笑している。以下の内容は生徒たちのいたずらを表現している。

翌日何の気もなく教場へ入ると、黒板一杯位な大きな字で、天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑った。おれは馬鹿馬鹿しいから、天麩羅を食っちゃ可笑しいかと聞いた。すると生徒の一人が、しかし四杯は過ぎるぞな、もし、と云った。四杯食はうが五杯食はうがおれの錢でおれが食ふのに文句があるもんかと、さつさと講義を済まして控所へ帰ってきた。十分立って次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯也。但し笑ふ可らず。と黒板にかいてある。（『漱石全集』 第三章）

坊っちゃんは生徒たちのいたずらに対して、生徒との間に激しい対話を展開している。

こんないたづらが面白いのか、卑怯な冗談だ。君等は卑怯と云ふ意味を知ってるか、と云ったら、自分がした事を笑はれて怒るのが卑怯ぢやらうがな、もしと答へた奴がある。やな奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教へに来たのかと思ったら情なくなつた。余計な減らず口を利かないで勉強しろと云って、授業を始めて仕舞った。（『漱

坊っちゃん生徒たちのいたずらに対して、「腹が立った」から、「そんな生意気な奴は教へない」と言っただけに帰っている。

以上のことから、坊っちゃんは業務に不慣れであり、仕事に専念する精神にも欠けている。更には生徒たちとの交流も下手である。いつも自分を「こんな田舎」に対立させ、新しい環境に馴染めない。そして生徒たちとの距離を縮める意識を持っていないのである。また、坊っちゃんは教師としての自己の評価について気にかけていないことが分かる。

ほかの教師に聞いて見ると辞令を受けて一週間から一ヶ月位の間は自分の評判が良かったのか、悪いだらうか非常に気に掛かるさうであるが、おれは一向そんな感じはなかった。(中略)おれは何事によらず長く心配しやうと思っても心配が出来ない男だ。教場のしくちりが生徒にどんな影響を與へて、其影響が校長や教頭にどんな反応を呈するか丸で無頓着であつた。(『漱石全集』 第三章)

以上の内容から分析すれば、坊っちゃんは教育に対して、あまり熱心さを持っていなかったことが確認できる。現代社会の基準で見れば、決して理想的な教師ではないと言える。

総括すると、坊っちゃんは生徒に対して、忍耐力が不足しており、生徒との関係も悪く、道徳の意識が欠けている。生徒は決して「敵」ではないはずだが、坊っちゃんいつも「対立」の意識を抱えていることが明らかとなった。

## 2、教育現場における理不尽さと闘う坊っちゃん

人物の言葉は人物の思想感情と性格の直截的な表明である。以下の言葉によって、坊っちゃんの教育に対するイメージが明らかにになると考えられる。坊っちゃんは学校の宿直制度に対して、次のように考えている。

学校には宿直があつて、職員が代わる代わるこれをつとめる。但し狸と赤シャツは例外である。何でこの両人が当然の義務を免かれるのかと聞いてみたら、奏任待遇だからと云う。面白くない。月給は沢山とる、時間は少ない、それで宿直を逃がれるなんて不公平があるものか。(『漱石全集』 第四章)

教師が交代で宿直当番に当たるが、免除されているのは校長と教頭の二人である。「義務を免かれる」理由は「奏任待遇」であることによる。『日本国語大辞典』によると「奏任官ではないが、奏任官と同様の待遇を受けるもの。奏任官待遇。外交官及領事館官制(明

治三二年）（1893）六条「名誉領事及名誉副領事は奏任待遇とす」（注11）と記されている。つまり、校長の狸と教頭の赤シャツは国家公務員と同じ待遇であるのだ。この引用文においては、坊っちゃん校長の狸と教頭の赤シャツの例外的待遇に不満をもち、その待遇は学校の不公平な制度を示していると考えている。坊っちゃんはその不公平な待遇に対して、以下のように述べている。

勝手な規則をこしらへて、それが当たり前だと云ふ様な顔をしている。よくまああんなに図々しく出来るものだ。これに就いては大分不平であるが、山嵐の説によると、いくら一人で不平を並べたつて通るものぢやないさうだ。一人だつて二人だつて正しい事なら通りさうなものだ。（『漱石全集』第四章）

坊っちゃんの反応はストレートである。彼は、狸と赤シャツは高い給料をもらっているが、勤務時間が短く、宿直当番もないことに対して、「不公平」であると思う。この考え方は坊っちゃん固有の価値観に基づいた人生観を表していると思われる。正しい事が正しく前に進むべきだが、これは人数に関係ないのであろう。坊っちゃんはその宿直制度が不公平だと思っているが、自分が担当の時には外へ出てしまった。

宿直をして、外へ出るのはいい事だが、悪い事だかしらないが、かうつくねんとして重禁固同様な憂き目に逢ふのは我慢の出来るもんぢやない。始めて学校へ来た時当直の人はと聞いたら、一寸用達に出たと小使が答へたのを妙だと思ったが、自分に番が廻つて見ると思ひ当たる。出る方が正しいのだ。（『漱石全集』第四章）

はじめて学校へ来た際に当直の人が外へ出るのは坊っちゃんの目からすると「妙」だと感じている。これは彼の常識的な認識であると思われる。しかし、自分が担当となった時には、「出る方が正しい」と思う。ここから見ると、坊っちゃんは他人に対して要求が高いが、自分に対してはそうではないのである。また、学校の規定によって、授業が終わってから、午後三時までは学校に残らなければならない。坊っちゃんはこの規定が不合理だと思ひ、次のように感じている。

いくら月給で買われた身体だつて、あいた時間迄学校へ縛りつけて机と睨めつくらをさせるなんて法があるものか。（『漱石全集』第三章）

その規定は坊っちゃんの目には不合理であるが、その実、坊っちゃんは教師として、いつも自分自身の利益を考え、自分のやることが月給に合っているのかを優先的に考慮していると言える。

また、坊っちゃんが天麩羅を食べに行き、そのことを生徒たちにかかわれた際には、

以下のように感じている。

憐れな奴等だ。子供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねっこびた、植木鉢の楓見たような小人が出来るんだ。（『漱石全集』 第三章）

坊っちゃんとは彼独自の正義感に基づいて、教育制度そのものへも批判的である。また、宿直する時、生徒たちはバツタを彼の布団の中に入れた。その事件によって、坊っちゃんは生徒たちと以下のような対話を展開している。

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バツタは何ぞな」と真先の一人がいった。やに落ち付いて居やがる。此学校ぢや校長ばかりぢやない、生徒迄曲りくねった言葉を使ふんだらう。

「バツタを知らないのか、知らなけりや見せてやらう」と云ったが、生憎掃き出して仕舞って一匹も居ない。

（中略）

いたづらで罰は御免蒙るなんて下劣な根性がどこの国に流行ると思ってるんだ。

（『漱石全集』 第四章）

坊っちゃんは、生徒たちのいたずらという行為に対して、彼らは「下劣な根性」を持っているという結論を出している。坊っちゃんのお育観において、人間は正しくないことをすれば、責任を負う勇氣を持つべきだが、生徒たちはそうではなかったのである。最後「上品も下品も区別ができないのは氣の毒ものだ」と言って生徒をつきはなしている。その後、「宿直事件」によって、坊っちゃんに対して「無礼」を働いた寄宿生の「処分法」について教員らは會議を行った。

會議と云ふものは生まれて始めてだから頓と容子が分からないが、職員が寄って、たかって自分勝手な説をたてて、夫を校長が好い加減に纏めるのだらう。纏めると云ふのは黒白の決しかねる事柄に就いて云ふべき言葉だ。この場合の様な、誰が見たって、不都合としか思はれない事件に會議するのは暇潰しだ。誰が何と解釈したって異説の出様筈がない。こんな明白なのは即座に校長が処分して仕舞へばいいに。随分決断のない事だ。校長つてものが、これならば、何の事はない、煮え切らない愚図の異名だ。（『漱石全集』 第六章）

坊っちゃんの心の中では、寄宿生のいたずらは誰の目にも、「不都合」で「異説」を出せないのである。彼は校長が一校のリーダーとして、独自で処分するのは結構であるが、會議をする必要がないと考えている。坊っちゃんが「悪行」に対して、明確な考えを持つ



ていることが分かる。これは彼の「正義感溢れる」表現の一つであると思われる。

最後は、生徒たちが坊っちゃんに謝ったが、坊っちゃんは「生徒があやまったのは心から後悔してあやまったのではない」と思ったため、生徒たちの性格に対して以下のような考えを述べている。

こんな卑劣な根性は封建時代から、養成したこの当地の習慣なんだから、いくら言って聞かしたら、教えてやったって、到底直りっこない。こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似をしなければならなくなるかも知れない。（『漱石全集』第十章）

坊っちゃんは封建教育制度の下で勉強していた学生が、封建教育制度の弊害を受けており、いくら正しい教育を受けても変わらないと考えている。こんな「卑劣な根性」は封建教育制度の結果である。坊っちゃんは封建的な教育制度に対する彼の不満と批判を表現している。教育は、封建的な制度ではない、高尚な品格を養成すべきであるという、この不満と批判は、坊っちゃん自身の価値観に基づいた教育観を表現していると思われる。

また、坊っちゃんは四国の中学校という教育機関の暗部と腐敗への批判者としての姿も見せている。

「あいつは、ふた言目には品性だの、精神的娯楽だのと云う癖に、裏へ廻って、芸者と関係なんかつけると、怪しからん奴だ。（中略）」

「うん、あの野郎の考じゃ芸者買は精神的娯楽で、天麩羅や、団子は物質的娯楽なんだろう。精神的娯楽なら、もっと大べらにやるがいい。何だあの様は。馴染の芸者が這入って来ると、入れ代わりに席をはずして、逃げるなんて、どこまでも人を胡魔化す気だから気に食わない。そうして人が攻撃すると、僕は知らないとか、露西亜文学だとか、俳句が新体詩の兄弟分だとか云って、人を煙に巻く積りなんだ。あんな弱虫は男じゃないよ。全く御殿女中の生まれ変わりか何かだぜ。ことによると、彼奴のおやじは湯島のかげまかも知れない」（『漱石全集』第十章）

以上の話は坊っちゃんと山嵐が赤シャツについて話す内容である。二枚舌の赤シャツは表面的には〈高尚な精神〉を持つていることを演じているが、実は「芸者買い」をしたことを認めず、言訳をくりかえすような「弱虫」である。彼の行為は虚偽であると思われる。赤シャツは教頭であって、田舎中学校の代表者の一人であると言える。代表者の邪悪と腐敗はこの学校の暗部を反映している。その意味では、赤シャツと対照的であるという点において、坊っちゃんの人間としての誠実さが鮮明になっている。

そして、赤シャツの策略で、坊っちゃんと山嵐は大きな騒動に巻き込まれた。次の場面では、坊っちゃんが教育制度の批判者として、自分の力を尽くして暗部と闘っている様子

が窺える。

「ああやって喧嘩をさせて置いて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事を書かせたんだ。実に奸物だ」(中略)

「そうさ。こっちはこっちで向うの急所を抑えるのさ」

「それもよからう。おれは策略は下手なんだから、万事よろしく頼む。いざとなれば何でもする」

(『漱石全集』 第十一章)

坊っちゃんと言山嵐の対話は坊っちゃんの単純さと善良な性格を表現している。この発話内容から分析して、坊っちゃんは赤シャツの個人的な虚偽を覆すため、「何でもする」気持ちでいっばいなのである。

以上のことから、坊っちゃんは正義感が溢れている人物だと言えるが、理想的な教師としては語られていないと考えられる。当時の社会背景からは、教師は生徒への献身的精神が必要とされていたが、坊っちゃんは四国の田舎の教師として、生徒たちとの間に大きな問題を起こし、「慈悲的姿勢」とは合致しない教師であつたと考えられる。

### 第三節 坊っちゃんの孤独感

平岡敏夫氏は『坊っちゃん』試論―小日向の養源寺―で、「滑稽の裏に真面目がついて居る。大笑の奥には熱涙が潜んで居る。雑談の底には啾々たる鬼哭が聞こえる」(注12)と指摘している。すなわち、明るいユーモアにみちた坊っちゃんの外貌の底部には「啾々たる鬼哭」、「父も母もない世界」に生い立った青年の存在としての坊っちゃんが浮かび上がってくるのである。

#### 1、 他郷に行く前の孤独感

坊っちゃんの生い立ちには寂しい。幼年時代において、ずっと父母の愛を与えられなかった。父親は坊っちゃんに対して、態度が冷たいのである。坊っちゃんの顔を見るたびに、嫌悪感を含める口調で坊っちゃんに皮肉を言っている。

おやぢは此とおれを可愛がつて呉れなかつた。(中略)おれを見るたびにこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやぢが云つた。(『漱石全集』 第一章)

家族に二子がいるが、坊っちゃんと兄の待遇は違う。母親は兄ばかり「最良」にしている。実母は坊っちゃんは「乱暴で」、「行く先が案じられる」という評価をしている。父母の二子に対する違う態度が、坊っちゃんの幼年時代の孤独感を形成する理由になっていると言える。換言すれば、兄の存在は、坊っちゃんの寂しい生い立ちを鮮明にしている。

また、坊っちゃんも母親が死ぬ前に、いたずらに母親を怒らせ、二度と彼の顔を見たくないと言わせた。

母が病気で死ぬ二三日前、台所で宙返りをしてへつつい角で肋骨を撲って大いに痛かった。母が大層怒って、お前の様なものの顔は見たくないと云うから、親類へ泊まりに行っていた。するととうとう死んだと云う報知が来た。そう早く死ぬとは思はなかった。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかったと思つて帰つて来た。（『漱石全集』 第一章）

母の死を坊っちゃんは、後悔することになった。母親は兄ばかりを可愛がるが、実際には、坊っちゃんが勘太郎にけがをさせた時、謝罪したのは母親である。そのことを踏まえると母親のこれだけの庇護がなくなつたのは、本来、孤独な坊っちゃんがさらに寂しくなつたとも言える。母親が死んだあとは、家族の三人が暮らしている。その時期は少年の坊っちゃんに対して、人間性を涵養する重要な時期であると思われる。しかしながら、父親も兄も、彼に配慮を与えなかつたのである。《家族》で暮らしているが、《家族》から愛されていない。その時期の坊っちゃんは、心底からの孤独感がいっぱいであつたであろうと思われる。坊っちゃんは四国の中学校へ赴任する前の状態は、物理学校を卒業したばかりで、社会経験が乏しく、収入もないのである。先祖代々の財産を売つた金から六百円を得て、三年間の学費と生活費として、一年に二百円を使い、卒業する時は既に残りが少ない状況なのである。

おれは六百圓の金で商売らしい商売がやれる譯でもなからう。よしやれるとしても、いまの様ぢや人の前で教育を受けたと威張れないから詰まり損になる許かりだ。資本杯はどうでもいいから、これを学資にして勉強してやらう。六百圓を三に割つて一年に二百圓宛使へば三年間は勉強ができる。（『漱石全集』 第一章）

以上の内容から分析すれば、坊っちゃんはその六百円を三年間の学費と生活費として暮らしている。その「三年間」で、兄は助けることもなく、誰からも金銭的な助けはなさそうである。まだ十代の坊っちゃんにとって、このような三年間はきわめて孤独であろう。家族の面から見ると、早く母親に死なれ、父親、兄と三人で暮らし、下女の清には可愛がつてもらっていたが、続いて父が亡くなり、ずっと仲が良くない兄は屋敷を売つて九州へ赴任し、そのあと一度も会わなかつたのである。清は坊っちゃんと離れたくないが、仕方なく甥の厄介になり、坊っちゃんは下宿生活をしている。

車へ乗り込んだおれの顔を昵と見て「もうお別れになるかも知れません。随分御機嫌

やう」と小さな声で云った。目に涙が一杯たまつて居る。おれは泣かなくなった。然しもう少して泣く所であつた。汽車が余つ程動き出してから、もう大丈夫だらうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、矢つ張り立つて居る。何だか大変小さく見えた。

（『漱石全集』 第一章）

坊っちゃんと言ひ別れる場面から見ると、坊っちゃんのことを愛する清は、彼と離れたくないことが分かる。坊っちゃんの「振り向いた」動作は彼の切り捨て難い感情を表していると思われる。すると、坊っちゃんは東京で清以外の家族がほとんどいないとも言えよう。坊っちゃんの心の中を覗いてみれば、家族に愛されなかった寂しさと清と離れる喪失感がいっぱいであると言えよう。

2、他郷に居る期間の孤独感

坊っちゃんは卒業したあと、物理学校の校長先生の推薦で、四国辺りへ行つて就職する。卒業したばかりの坊っちゃんは、初めて一人で東京以外のところに行くのである。

生まれてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時許りである。今度は鎌倉所ではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。（『漱石全集』 第一章）

一人で見知らぬ環境に行くのは、寂しいであろうと思われる。坊っちゃんは一人で僻で四国辺の田舎に出発した。そこに到着した後は、自分で宿屋を探している。

何だか二階の梯子段の下の暗い部屋へ案内した。熱くて居られやしない。こんな部屋はいやだと云つたら生憎みんな塞がつて居りますからと云ひながら革靴を抛り出した儘出て行つた。仕方がないから部屋の中へ這入つて汗をかいて我慢をして居た。（中略）帰りがけに覗いて見ると涼しさうな部屋が沢山空いている。（『漱石全集』 第二章）

まず坊っちゃんは宿屋を探し始めてすぐに他人の冷遇に見舞われた。そこで坊っちゃんは狭くて暗い部屋へ押し込められた理由が「茶代をやらない所為」だと思い、僅かな十四円の「餘り」から五円を出して宿屋の下女にあげた。この坊っちゃんの行為は、彼の無鉄砲な性格によるものであると同時に、自身の無力さを隠すための虚栄であるのかもしれない。この核心にある無力なものであるという意識は坊っちゃんの孤独感を体現しているとも考えられる。坊っちゃんは四国に知り合いは一人もいないし、一人で全ての問題を直面しなければならぬ。そして、卒業したばかりで社会経験は乏しく、出身地だけを誇りに思つて優越感を抱いているのである。四国の田舎がもとと坊っちゃんの気に入らない所であることは言うまでもないが、中学校という職場も自分と相入れない。

夫から申し付けられた通り一人一人の前へ行つて辞令を出して挨拶をした。（中略）  
十五人目に体操の教師へと回つて来た時には、同じ事を何返もやるので少々ぢれつた  
くなつた。（『漱石全集』 第二章）

以上の内容の通り、坊っちゃんも教員たちに挨拶する時に一人一人に辞令を見せるという面倒な手間をかけるのは「ぢれつたくなつた」と語っている。また、教員たちにも文句をつけている。

畫字の教師は全く芸人風だ。べらべらした透きやの羽織を着て、扇子をぱちつかせて、御国はどちらでござす、え？東京？夫りや嬉しい、お仲間が出来て……私もこれで江戸っ子ですと云つた。こんなのが江戸っ子なら江戸には生まれたくないもんだと心中に考へた。（『漱石全集』 第二章）

同じ江戸生まれの同士に対して、坊っちゃんは親しみではなく、輕蔑感を抱いているようである。同郷の同僚と一緒に話をするのは本来ならば孤独感を和らげることもあるが、坊っちゃんは全くそのような思いを抱いていなかったのである。坊っちゃんの性格と考え方は彼の孤独を決定付けていると思われる。生徒たちにもなかなか馴染めない坊っちゃん自身より背が高く強そうなのを見ると、「あんな奴」を教えるのかと自信がない。生徒たちから大きな声で先生と呼ばれることも、坊っちゃんにとっては、「午砲」を聞いたような感じである。一貫して生徒との間に距離をとっていることが窺える。つまり、何事も坊っちゃん一人で行つてきたのである。一人で「無暗に足の向く方を歩き散らした」り、一人で赤い手拭きをぶら下げて温泉に行つたりしている。そして、蕎麦屋で天麩羅そばを四杯食べたことや、団子屋で団子を食べたこと、さらに、温泉に出かけてその中で泳いだことなどを生徒たちからかわれ、「生徒全体」が彼一人を「探偵している」ように思われ、「くさくさ」している。一人で見知らぬ町に行つて誰にも信用できないような気がしてならない。自分の悩みを打ち明ける相手も見つからない。坊っちゃんは「考へ見る」と、「厄介な所」へ来たと思ふをこぼした。ここで、坊っちゃんの頭に浮かぶのは、東京で彼のことをただ一人可愛がつてくれた年取つた下女の清のことである。この世界に、坊っちゃんの理解者は清一人しかない。唯一信用できる相手は遠く離れた東京にいる清しかない。一人ぼっちの坊っちゃんは寂しいと考えられる。

### 3、故郷に戻つた後の孤独感

坊っちゃんは教頭の赤シャツを殴つた後に、辞表を出し、四国を離れて東京に戻つたのである。

おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞆を提げた儘、清や帰つたよと飛び込んだら

あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来てくださったと涙をぽたぽたと落とした。おれも餘り嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云った。其後ある人の周旋で街鉄の技手になった。（『漱石全集』 第十一章）

ここで、坊っちゃんが自分の愛する人と一緒に暮らし、安定した仕事をしているのは、幸福な人生が始まったと言える。しかしながら、この安定した幸福は長くは続いていない。

清は玄関付きの家でなくっても至極満足の様子であったが気の毒な事に今年の二月肺炎に罹って死んで仕舞った。（『漱石全集』 第十一章）

清と一緒に暮らしている間は、坊っちゃんはきわめて幸福であつたろう。清が死んだ後は、坊っちゃんはまた一人ぼっちになっている。彼の世話をしたり、可愛がつてくれたりする人はいなくなった。坊っちゃんはこの後、一緒に過ぐす存在がいなくなったと言える。即ち、坊っちゃんと呼んでくれる人がいなくなった。清が死んだ今、坊っちゃん一人で生きて行かなければならないのである。その後の人生は寂しくなつたと考えられる。坊っちゃんの人生は孤独感が充満していると言える。

#### 第四章 坊っちゃんとの登場人物との対立関係

夏目漱石は「対立」の構図を通して坊っちゃんの運命を描き出している。「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている」という書き出しの一行は、坊っちゃんの性格と子供時代をよく表している。こうした無鉄砲な坊っちゃんについてはこの作品の中で、さまざまな人間との対立の構図において描き出されている。先にも触れた通り、子供時代、父母に愛されなかったことに起因する父母との対立、学生時代、家屋敷の相続に関する兄との対立、四国の田舎中学校に赴任した際の生徒との対立、江戸っ子として地方の人との対立、教員との対立、さらに校長や教頭など、周りの人間との対立の様相が挙げられる。

##### 第一節 坊っちゃんと家族との対立

坊っちゃんは、父母の愛を得られない人である。「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」という書き出しは、坊っちゃんの性格をよく現わしている。「二階から飛び降りて腰を抜かしたり」、西洋製ナイフで「右手の親指の甲をはずに切り込んだり」したが、父から叱られるばかりで、一向に父親の関心を得られない。「おやぢはちっともおれを可愛がって呉れなかった。母は兄許り鼻屑にして居た」と語られている。彼は親に甘えることができなかったし、また甘えようもしない子供であった。彼は可愛い気のない子供だったのである。

おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやぢが云った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云った。成程碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。只懲役に行かないで生きて居る許りである。（『漱石全集』 第一章）

以上の引用内容から見ると、坊っちゃんは父母の目には、彼が「乱暴」で、前途がない人として映っており、この先も彼には望みを持つていないと感じていたことが分かる。また、坊っちゃんが母親に似ている優男の兄ばかり可愛がる母親に抵抗して、「兄の眉間に将棋の駒を叩きつけて」怪我をさせたときも、父は「おれを勘当する」と言い出し、その時、泣きながら謝ったのは母ではなく、下女の清であったことを語っている。坊っちゃんと父母の対立を形成するのは本当に坊っちゃんの「無鉄砲」の性格のせいなのか。父母の愛を得られないこの絶望的な心情と「損ばかりしている」ことには、異常なものが感じられる。作品の内容から見ると、坊っちゃんの家庭はある程度の財産を所有している中産階級である。兄は実業家になると言い、英語を勉強しているから、社会的成功の見込みがある。乱暴で、社会的成功が望めない、家屋敷も相続できない坊っちゃんが嫌われるのは必

然的であるにせよ、兄弟に対して、あからさまな差をつけて接するのは、父母が冷たいからであるという解釈が適当であると思われる。しかしながら、坊っちゃんは父母の冷淡な態度に対して、もう慣れているようである。この「慣れる」とは、坊っちゃんの諦念を示しているのであろうと思われる。例えば、母が死んだ後は、坊っちゃんは父と兄と三人で暮らしている。父は「人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖の様に言っていた」が、それに対して、坊っちゃんは自分自身のことを「何が駄目なんだか」分らないと語っているのだ。このような環境で暮らすのは、坊っちゃんにとって極めて不愉快であろう。そして、彼のその年齢や「無鉄砲」な性格からすると父に反論すべきであろうと思われる。しかし、坊っちゃんはそうしていない。何故ならば、当時は「家父長制」が存在していたことが理由の一つにあげられる。『日本国語大辞典』によると、「①父系の家族制度において、家長がその家族全員に対して支配権をもつ家族形態。奴隷制社会にみられる。②家父長制的家族のイデオロギー、およびこれを原理とする社会の支配形態。家長制」（注13）と記されている。坊っちゃんの父親に対する無反抗は、家父長制の社会に生まれ育った影響であると推測できる。先にも述べたが、父親との関係を確認した限りの坊っちゃんの生い立ちは寂しい。父親は坊っちゃんを可愛がることをしなかったが、母親も兄ばかり愛している。坊っちゃんは母親が死ぬ二三日前に、母親を怒らせている。当時の状態は以下の引用部分の内容から分かる。

母が病気で死ぬ二三日前、台所で宙返りをしてへつつい角で肋骨を打って大いに痛かった。母が大層怒って、御前の様なものの顔は見たくないと云ふから、親類へ泊まりに行つて居た。するととうとう死んだと云ふ報せが来た。さう早く死ぬとは思はなかった。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかったと思つて歸つてきた。（『漱石全集』 第一章）

坊っちゃんは無鉄砲な性格で、母親から愛想をつかされ、父親からも愛情を受けず、持て余されていた。兄との関係についても、以下のように述べている。

兄は実業家になるとか云つて頻りに英語を勉強している。元来女の様な性分で、仲がよくなかった。十日に一遍ぐらいの割で喧嘩をして居た。（『漱石全集』 第一章）

以上の内容から見ると、坊っちゃんは兄と、もともとの関係がよくない。以下の出来事からは、兄との対立関係が明らかである。



ある時将棋をさしたら卑怯な待ち駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やかした。あんまり腹が立ったから、手に在った飛車を肩間へ叩きつけてやった。肩間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言いつけた。おやじがおれを勘当すると言ひ出した。（『漱石全集』 第一章）

兄弟の間で喧嘩をするのは別段珍しいことではないが、兄が父親に言いつけたのは、兄のずるさを表していると思われる。「ずるい」兄と無鉄砲な坊っちゃんでは対立関係が形成されるのは当然であろうと考えられる。兄が仕事の都合で九州に行つて以来、二人は会っていない。そういった家族の中で、「五六年の間はこの状態で暮らして居た」坊っちゃんは愛情を受けないまま、生まれ育つたのである。家族との対立を通して、坊っちゃんはその家庭で孤独な立場にあった。

## 第二節 坊っちゃんと生徒との対立

それから赴任した四国の田舎町がもとと坊っちゃんの氣に入らないところであつた。坊っちゃんのその後の対立相手は生徒たちである。生徒たちになかなか馴染めない。自己より背が高く強そうな生徒たちを見ると、「あんな奴を教えるのかと思つたら何だか氣味が悪く」なり、大きな声で先生と呼ばれるのも、「腹の減つ時に丸の内や午砲を聞いたような氣」がして閉口している。着任して早々、坊っちゃんは生徒たちと対立している。坊っちゃんが初めて授業をした時、教室の中で一番強そうなやつが立つて、「あまり早くて分からんけれ、まちつと、ゆるゆる遣つて、おくれんかな、もし」と言つたことがあつた。言うことを聞いてやれば対立することはないが、坊っちゃんは「おれは江戸っ子だから君等の言葉は使えない。分からなければ、分かるまで待つてゐるがいい」と答え、知らないうちに生徒との対立関係が深刻になっている。また、知己がない他郷で、坊っちゃん一人の時間をつぶし、気分転換するため、自分の習慣と好みを持ち、暇な時間をつぶし、四国田舎の生活を豊かなものにするようにしている。暇なとき、坊っちゃんは当地で様々なところへ行っている。

ある日の晩大町と云ふ所を散歩して居たら郵便局の隣に蕎麦屋の前を通つて薬味の香ひをかぐと、どうしても暖簾がくぐりたくなつた。（中略）其晩は久し振りに蕎麦を食つたので、旨かつたから天麩羅を四杯平らげた。（『漱石全集』 第三章）

坊っちゃんは長い期間、蕎麦を食べていなかったの、四杯もの天麩羅を食べている。しかし、彼にとって思いもよらなかつたのは、この些細なことで、彼が生徒たちの笑ひ者になつたことだ。坊っちゃんは翌日教室に入るとき、黒板一杯ぐらいの大きな字で「天麩羅先生」と書いてあるのに気づく。

翌日何の気もなく教場へ入ると、黒板一杯位な大きな字で、天麩羅先生とかいてある。  
（中略）十分立って次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯也。但し笑ふ可らず。と黒板にかいてある。（『漱石全集』 第三章）

生徒たちは坊っちゃん的生活について、関心を持つていようである。しかし、彼らの失礼な行為は、坊っちゃんを彼らの尊敬する先生としては捉えていなかったことを示している。むしろ、坊っちゃんを彼らのうき晴らしの対象にしていると言えよう。生徒たちの行為は坊っちゃんとの対立関係を形成する理由の一つであると言える。また、坊っちゃんは「温泉に行った帰りがけに」、団子を食べたことも生徒たちに笑われている。

四日目の晩に住田と云ふ所へ行って団子を食べた。此住田と云ふ所は温泉のある町で城下から汽車だと十分ばかり、歩行いて三十分で行かれる、（中略）温泉に行った帰りがけに一寸食つて見た。今度は生徒にも逢はなかつたから、誰も知るまいと思つて、翌日学校へ行って、一時間目の教場へ這入ると団子二皿七銭と書いてある。實際おれは二皿食つて七銭払つた。どうも厄介な奴等だ。二時間目にも（中略）団子旨い旨いを書いてある。（『漱石全集』 第三章）

以上の引用部分から見ると、生徒たちは坊っちゃんのすべてを監視しているようである。坊っちゃんがどれだけのものを食べて、いくらのお金を支払つたか、彼らは全部知つていゝる。これらの行為は彼らが坊っちゃんに関心を持つていゝると同時に坊っちゃんを先生として尊敬してゐない有力な証拠と言えるであらう。また、坊っちゃんが温泉の中で泳いだことさえも、例のとおり黒板に湯の中で泳ぐべからずと書かれることがあつた。そういったことから分析すれば、生徒たちとの対立関係を形成するのは、坊っちゃん自身の有り様のみが原因となつてゐるのではなく、生徒のいたずらが大きな原因になつてゐると考えられる。坊っちゃんは三つの事件について、「くさくさした」と思つてゐるが、それと同時に「やろうと思つた事をやめる様な俺ではない」という考えも持つてゐる。こういったことを踏まえると、坊っちゃんの単純明快さは彼自身にとって性格上の美点であると思なせる。いくら怒つても、早く忘れ、その後も影響なく自分のやりたいことをやつてゐる。ただし、生徒たちのいたずらだの、彼を監視することだの、あざ笑つてゐたことに対しては、坊っちゃんは「何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえる様な所へ来たのか」と思ひ、自嘲的に振り返ると同時に、後悔の念を抱いてゐると言えよう。さらに、学校は宿直制度があるため、ある日坊っちゃんはその当番をしてゐるとき、生徒たちは彼にいたずらをしてゐる。

何だか両足へ飛び付いた。ざらざらと当たつたものが、急に殖え出して脛が五六ヶ所、

股が二三ヶ所、尻の下でぐちゃりと踏み潰したのが一つ、臍の所迄飛び上がったのが一つ―愈驚いた。(中略)

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バツタは何ぞな」と真つ先の一人がいった。(『漱石全集』 第四章)

生徒たちは坊っちゃんにいたずらをするために、彼の布団の中にたくさんのバツタを入れている。しかし、坊っちゃんがなぜこうしているのかを聞いたとき、彼らは知らないふりをしている。生徒たちの行為と反応を分析すれば、彼らが自分たちの行為を認めないのは、坊っちゃんを軽んじていることが理由として考えられる。

以上の考察を通して、生徒たちの目から見ると、坊っちゃんは外地から来た孤立した教師であり、彼らのいたずらの対象として笑い者になっていることが分かる。

### 第三節 坊っちゃんと教員との対立

対立の構図をさらに探ると興味深い関係がある。第六章では、坊っちゃんと山嵐は氷水代をめぐって喧嘩をしている。その背景として、次の場面が注目できる。これは坊っちゃんが赤シャツと野だと一緒に釣りに行った時のことであつた。

こんなことを考へて居ると、何だか二人がくすくす笑ひ出した。笑ひ声の間に何か云ふが途切れ途切れで頓と要領を得ない。(中略) おれは外の言葉には耳を傾けなかったが、バツタと云ふ野だの語を聞いた時は、思わず屹となった。野だは何の為かバツタと云ふ言葉だけことさらに力を入れて、明瞭におれの耳に入る様にして、其のあとをわざとぼかして仕舞つた。(中略) 言葉は斯様に途切れ途切れであるけれども、バツタだの、団子だのと云ふ所を以つて推し測つて見ると、何でもおれのことに就いて内所話しをして居るに相違ない。(『漱石全集』 第五章)

赤シャツは彼は自分の考えを明確に表現せず、遠回しな言い方で、坊っちゃんと山嵐を挑発している。坊っちゃんは「堀田がとか扇動してとか」という文句が気にかかっている。以下の場面では、単純な坊っちゃんは簡単に赤シャツの言葉を信じたことが語られている。彼の考えは以下のようである。

あの山嵐が生徒を扇動するなんて、いたづらをしさうもないがな。一番人望のある教師だと云ふから、やらうと思つたら大抵の事は出来るかも知れないが、―第一そんな廻りくどい事をしないでも、ぢかにおれを捕まへて喧嘩を吹き懸けりや手数が省ける譯だ。おれが邪魔になるなら、実は是々だ、邪魔だから辞職してくれと云や、よささうなもんだ。物は相談づくでどうでもなる。(中略) ここへ来た時第一番に氷水を奢

ったのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢ってもらっちゃ、おれの顔に関わる。（『漱石全集』第六章）

その後、単純な坊っちゃん、山嵐の奢った氷水の金を返そうとしている。次の場面では、坊っちゃんの怒った心理状態が語られている。

それに裏へ廻って卑劣な振舞をするとは怪しからん野郎だ。あした行つて一錢五厘返して仕舞へば借も貸もない。さうしておいて喧嘩をしてやらう。（『漱石全集』第六章）

この箇所からは、坊っちゃんが赤シャツと野だいこの話を信じて、山嵐に対して憎しみを持ち、喧嘩する決意をしていることが分かる。即ち、坊っちゃんの中に山嵐との対立意識が形成されている。

おれは机の上にあった一錢五厘をだして、是をやるからとつて置け。先達て通り町で飲んだ氷水の代だと山嵐の前へ置くと、何を云つてるんだと笑ひかけたが、おれが存外真面目で居るので、詰まらない冗談をするなど錢をおれの机の上に掃き返した。おや山嵐の癖にどこ迄も奢る気だな。

「冗談じゃない本当だ。おれは君に氷水を奢られる因縁がないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一錢五厘が気になるなら取ってもいいが、なぜ思い出した様に、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、いやだから返すんだ」  
山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云った。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣をあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから、動きがとれない。人がこんなに真っ赤になつてゐるのにふんと云ふ理屈があるものか。（『漱石全集』第六章）

以上の内容から分析すれば、赤シャツの「依頼」とは、彼による「秘密にしてくれ」と言う言葉を指す。すなわち、これは赤シャツの陰謀と言えよう。また、以下の場面は、坊っちゃんと山嵐の喧嘩が赤シャツらの陰謀によるものであることを裏付けている。

山嵐もおれに劣らぬ癩癪持ちだから、負け嫌な大きな声を出す。控所に居た連中は何事が始まったかと思つて、みんな、おれと山嵐の方を見て、顎を長くしてぼんやりして居る。（中略）みんなが驚いてるなかに野だ丈は面白さうに笑つて居る。おれの大きな眼が、貴様も喧嘩をする積かと云ふ権幕で、野だの干瓢づらを射貫いた時に、野

だは突然真面目な顔をして、大につつしんだ。（『漱石全集』第六章）

野だの態度は、坊っちゃんと山嵐の喧嘩事件が彼らの陰謀であることを表している。坊っちゃんにおける思慮の足りない行為は、結局赤シャツらの思惑通りになったと言える。逆に言えば、赤シャツと野だの目から見ると、坊っちゃんはいくまでも未熟者の「坊っちゃん」で、また社会経験が乏しく、騙されやすい人であろうと思われる。しかしながら、単純な坊っちゃんは自分の理念を持っている。赤シャツらと接触する機会が多くなり、付き合いの時間が長くなるほど、彼らの虚偽について気づいていくことになる。

また前に触れたが、坊っちゃんは生徒たちからかわれる事件により、教員たちが会議をし、坊っちゃんの行為について意見を出している。この場面において、山嵐だけ「奮然」として、「起ちあがった」。そして以下のように自分の見解を述べている。

「私は教頭及び其他諸君の御説には全然不同意であります。と云ふものは此事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新来の教師某氏を軽侮して之を翻弄し様とした所為とより外には認められぬのであります。（中略）教育の精神は単に学問を授ける許りではない、高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹すると同時に、野卑な、軽躁な、暴慢な悪風を掃蕩するにあると思ひます。（『漱石全集』第六章）

以上のように、山嵐だけ公平な観察者として、道理を込めた発言を行っている。彼は教育精神に関して自分の見解を述べている。坊っちゃんは正義に基づいた言葉を述べていた山嵐が、赤シャツらに対しては「取り合わなかった」と認識している。その時から、坊っちゃんと山嵐との関係が硬直化から徐々に緩和するようになっていく。一方で、事態が白熱化するのは、坊っちゃんと山嵐の二人が手を組んで赤シャツらに対抗する場面である。二人は赤シャツと野だの虚偽的な行為について、自分の力を尽くして彼らと戦いを始めている。坊っちゃんと山嵐は一緒に計画を立て、赤シャツと野だに教訓を与えるつもりなのである。

「さうさ。こっちはこっちで向ふの急所を抑へるのさ」

「それもよからう。おれは策略は下手なんだから、萬事宜しく頼む。いざとなればなんでもする」（『漱石全集』第十一章）

第七章から第十一章では、坊っちゃんが帰郷を決意することになる事件について語られている。日露戦争の祝勝会の日に、坊っちゃんと山嵐は赤シャツの謀略により、中学校と師範学校の生徒同士の大騒ぎに巻き込まれている。以下は祝勝会の出来事について語っている。

おれと山嵐が感心のあまり此踊りを余念なく見物して居ると、半町ばかり、向の方で急にわつと云ふ鬨の聲がして、今迄穏やかに諸所を縦覧して居た連中が、俄かに波を打って、右左りに揺き始める。喧嘩だ喧嘩だと云ふ声がすると思ふと、人の袖を潜り抜けて来た赤シャツの弟が、先生又喧嘩です、中学校の法で、今朝の意趣返しをするんで、又師範の奴と決戦を始めた所です、早く来てくださいと云ひながら又人の波のなかへ潜り込んでどつかへ行つて仕舞つた。（『漱石全集』 第十章）

坊っちゃんと山嵐は赤シャツの弟に誘われ、祝勝会の余興を見に行つていた。なぜ赤シャツの弟は山嵐を誘うのか。なぜ喧嘩ということを伝える人はまた赤シャツの弟なのだろうか。そしてなぜ赤シャツの弟は「早く来てください」と言つたのか。この一連の問題から分析すれば、これはいずれも赤シャツの策略であると考えられる。坊っちゃんと山嵐の二人は先生として、その「喧嘩」を止めようとしている。しかし、事態は以下のように進んでいく。

山嵐は世話の焼ける小僧だ又始めたのか、いい加減にすればいいのに逃げる人を避けながら一散に駆け出した。見て居る訳にも行かないから取り鎮める積もりだらう。おれは無論の事逃げる気はない。山嵐の踵をふんであとからすぐ現場へ駆けつけた。（中略）山嵐は困つたなど云ふ風で、暫く此の乱雑な有様を眺めて居たが、かうなつちや仕方がない。巡查がくると面倒だ。飛び込んで分け様と、おれの方を見て云ふから、おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈しそうな所へ踊りこんだ。（中略）巡查は十五六名来たのだが、生徒は反対の方面から退却したので、捕まつたのは、おれと山嵐だけである。（『漱石全集』 第十章）

坊っちゃんと山嵐は教師としての責任により、喧嘩を止めようとしたが、結局、その事件に巻き込まれることになった。実は、それも赤シャツの陰謀である。坊っちゃんと山嵐の衝動的な性格は、二人の弱点であると考えられる。赤シャツはその二人の弱点を利用し、この事件を策略した。そのことで、坊っちゃんと山嵐は四国新聞の記事により、「純良なる生徒を示唆して此騒動を喚起せる」人間になつてしまった。そして山嵐は辞職に追い込まれるはめになつたのである。以下の引用は、坊っちゃんと山嵐の対話である。

「ああやつて喧嘩をさせて置いて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事を書かせたんだ。実に奸物だ」

……（中略）

「そうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑えるのさ」

「それもよからう。おれは策略は下手なんだから、万事よろしく頼む。いざとなれば何でもする」  
（『漱石全集』 第十一章）

坊っちゃんとは山嵐の対話は坊っちゃんの単純さと善良な性格を表現している。この内容から分析してみると、坊っちゃんは赤シャツに「天誅を加える」ため、「何でもする」気持ちでいっぱいである。一方で、この箇所は坊っちゃんと赤シャツらとの対立関係が頂点になった状態を表現している。こういった事件の中で、坊っちゃんは野だと、激しい対立の会話をかわしている。

其のうち、野だが出て来て、いや昨日は御手柄で、――名誉のご負傷でげすか、と送別会の時に撲った返報と心得たのか、いやに冷やかしたから、余計な事を言わずに絵筆でも舐めて居ろうと云ってたつた。するとこりや恐れ入りやした。然しさぞ御痛い事でげせうと云ふから、痛からうが、痛くならうがおれの面だ。貴様の世話になるもんかと怒鳴りつけてやったら、向ふ側の自席へ着いて、矢っ張りおれの顔を見て、隣の歴史の教師と何か内緒話をして笑っている。（『漱石全集』 第十一章）

この箇所にある通り、野だの嘲笑は坊っちゃんを怒鳴らせることになる。ただし、このような赤シャツらとの対立関係は、実際には第八章から前哨戦が始まっている。それは、次の場面から明らかである。うらなりの転勤とそれに伴う坊っちゃんの待遇をめぐり、坊っちゃんと赤シャツは、らちがあかない押し問答をしている。

「さつき僕の月給をあげてやると云ふ御話でしたが、少し考が変わったから断りに来たんです」

（中略）

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任すると云ふ話でしたからで……」  
さうぢやないんです、ここに居たいんです。元の月給でもいいから、郷里に居たいのです」

「君に古賀君から、さう聞いたのですか」

「そりや当人から、聞いたんぢやありません」

「ぢや誰からお聞きます」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんのお母さんから聞いたのを今日僕に話したのです」

「ぢや、下宿の婆さんがさう云ったのですね」

「まあさうです」

「それは失礼ながら少し違ふでせう。あなたのおっしゃる通りだと、下宿の婆さんの云ふ事は信ずるが、教頭の云ふ事は信じないと云ふ様に聞こえるが、さう云ふ意味に

解釈して差支ないでせうか」

(中略)

「あなたの云ふ事は本当かも知れませんが―とにかく増給は御免蒙ります」

「それは益々可笑しい。今君がわざわざ御出でに成ったのは増俸を受けるには忍びない、理由を見出したからの様に聞こえたが、その理由が僕の説明で取り去られたにも関わらず増俸を否まれるのは少し解しかねる様ですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断りますよ」(『漱石全集』第八章)

坊っちゃんも赤シャツの「巧妙な弁舌」で、「頭はあまりえらくないのだから」、「考えたって同じことです。左様なら」と返答して帰った。心底から赤シャツのことを信じることができず、対立関係が益々深刻になっている。以後、坊っちゃんは、うらなりの送別会でも帰るのか帰さぬのかと言って野だを殴った。

座敷を出かかる所へ、野だが箒を振り振り進行して来て、や御主人が先へ帰るとはひどい。日清談判だ。帰せないと箒を横にして行く手を塞いだ。おれはさつきから癩癰が起こつて居る所だから、日清談判なら貴様はちゃんちゃんだらうと、いきなり拳骨で、野だの頭をばかりと喰らわしてやった。野だは二三秒の間毒気を抜かれた牀で、ぼんやりして居たが、おや是はひどい。(『漱石全集』第九章)

ここにおいて、坊っちゃんと野だとは、激しい対立関係に達する。以上のことをまとめると、坊っちゃんは虚偽的なあり様の人物だけに反感嫌悪を持っている。換言すれば、坊っちゃんは虚偽的な人物に対して、対立の意識を持っているようである。正義感が溢れる山嵐と、大人しいうらなりに対してはそうではない。彼は善良なものと正義であるものを重視すると言えよう。こう見てくると、会話からたどられる坊っちゃんと人々の対立関係は、この小説の中心線として一貫したものであることが分かる。このように、坊っちゃんは複雑で彼にとって暗黒な社会環境に適応できず、最後には学校での激しい闘争で排除され、失敗して帰郷することになる。



## 第五章 清における坊っちゃんの受容

### 第一節 清という存在

清は坊っちゃんの家で「十年来召し使っている」女中である。作品のはじめの部分で、坊っちゃんは清について、次のように語っている。

此の下女はもと由緒のあるものだったが、瓦解のときに零落して、つい奉公迄するようになったのだと聞いている。だから婆さんである。此の婆さんがどういう因縁か、おれを非常にかわいがってくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想がつかした。おやじも年中持て余している。町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする。此のおれを無闇に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめて居たから、他人から木の端のように取り扱われるのは何とも思わない、却ってこの清の様にちやほやしてくれるのを不審に考えた。（『漱石全集』 第一章）

清は坊っちゃんが「不審に思う」ほど彼を可愛がる。そして、坊っちゃんの性格を「真っ直ぐでよい御気性」と褒めることがあった。坊っちゃんは清が褒めることに對して、「おれは御世辞は嫌いだ」という返答をすることが「常であった」が、清は「嬉しそうに」坊っちゃんの顔を眺め、「自分の力でおれを製造して誇てる様に」見える。しかし、これは坊っちゃんにとって「少々気味が悪かった」と語っている。その一方で、清はいつもおやじと兄に内緒で、ものを買ってくれる。ずっと坊っちゃんの将来については「立身出世して立派のものになる」という信念を持っている。

清はどう言うわけか、坊っちゃんが気の毒に感じるぐらいに、ある意味愚かしいまでの母性を持つて、「おれを非常に可愛がってくれ」、無条件の愛情を坊っちゃんに注ぐのである。母が死んでからは、ますますそうなる。無鉄砲な坊っちゃんのすることが何でも正しいと信じ、いつも黙って彼を受け入れている。

### 第二節 清に対する坊っちゃんの心情の変化

坊っちゃんは、四国に落ち着いてから、「文章がまずい上に字を知らない」自分だが、「清は心配しているだろう」と思い、清に長い手紙を書いた。この坊っちゃんの有り様からは、知らないうちに、清に対する心情が変わっていることが窺える。即ち、清の「心配」に對して「不審」の考えはなくなっている。清も手紙で「ほかの人に無暗に渾名なんか、つけるのは人の恨まれる」だの、「寝冷えをして風邪を引いてはいけない」だの、「頼りになるは御金ばかりだから、なるべく儉約して」だのと、助言を与えている。その助言に坊っちゃんも「大いなる慰藉」を見出しているはずで、清の愛に包まれていると言っても

いいかもしれない。清の坊っちゃんに対する愛は、親しい母親が自分の子供に与えるような純一な愛とも言えることができる。

子供の頃は、清にたいへん可愛がってもらっていたが、感謝するより「少々気味が悪かった」と語っている。しかし、清から離れて、四国の中学校という「厄介なところ」に働きに来てから、彼は清をやつと見直した。

それを思うと清なんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る貴い。今迄はあんなに世話になって別段有り難いとも思わなかったが、かうして、一人で遠国へ来て見ると、初めてあの親切がわかる。（中略）ほめる本人の方が立派な人間だ。（『漱石全集』 第四章）

田舎の複雑な人間関係に適應できない坊っちゃんは、そこで出会う人々の「卑劣な根性」を見抜いた。そしてそのことは、自分に無償の愛を注ぐ清の「立派さ」を実感することにもつながった。

また、学校で何かあれば、まず思い出すのは清のことである。赤シャツと釣りに行ったが、坊っちゃんは釣りの事には集中してなかったのである。また、赤シャツと野だの間の「内緒話」を「聞きたくもない」のである。彼は空を見ながら清のことを考えている。

金があつて、清をつれて、こんな綺麗なところへ遊びに来たら囁愉快だろう。いくら景色がよくつても野だ杯と一緒に詰まらない。清は皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥づかしい心持ちはしない。（『漱石全集』 第五章）

坊っちゃんがきれいな景色を見た時に思い出したのは清である。また赤シャツに自分の単純であることを笑われた時に、以下のように語っている。

清はこんな時には決して笑った事はない。大に感心して聞いたもんだ。清の方が赤シヤツより余つ程上等だ。（『漱石全集』 第六章）

他人に笑われた時に、清の事を思い出している。すなわち、どんな事が起こっても、誰に会つても、まず心の中に浮かんでくるのは清の姿である。この点から見れば、清は坊っちゃんの心に重要な位置を占めていることが分かるはずである。坊っちゃんにとっては清は心の支えになっていたと言える。

そして、坊っちゃんは清と暮らしたいと思い、四国の中学校の教師を辞めてからすぐに清がいる東京に戻ってきた。彼が「東京へ着いて下宿へも行かず、革靴を提げた儘」清に会いに行ったのだと考える。最後に、坊っちゃんは一貫して自分のことを無条件に愛してくれていた清と一緒に住む。

清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来てくださったつたと涙をばたばたと落とした。おれもあまり嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云った。（『漱石全集』 第十一章）

この箇所からは坊っちゃんが清を自分の親よりも親しい人物として捉えていることが窺える。清は辛抱強く愛する性格なのであろう。清は坊っちゃんに手紙を送るがその中で「坊っちゃん竹を割ったような気性だから、癩癩が強すぎてそれが心配になる」と辛抱することの必要性を伝えている。坊っちゃんは四国での経験をへて、知らないうちに、清に対する心情が変わっている。宿直の晩に生徒にいたずらされ、怒っている時に、最近の若者は教育がなっていないと坊っちゃんは憤っている一方で清に対して坊っちゃんは、「教育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る貴い」と高く評価しているのだ。

### 第三節 清における受容という有り様

清について、平岡氏は次のように論じている。

読者はこの末尾のかなしみの意味を見落としている。「御墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待つて居ります」という一行を、人はもう一度あらためて読みなおしてみるといいのだ。これは実に異様なことばではないだろうか。父母のことばでも兄弟姉妹のことばでもない。下女の婆やといっしょに墓に眠るべき男。この奇妙で無気味なイメージは、下女の婆やのかわりに、恋人か愛妻を入れかえれば、もつともぴったりする。（注14）

平岡氏は清の坊っちゃんに対する感情が「恋人」または「愛妻」の感情であると指摘した。確かに作品の内容から分析すると、清は小説の中に多くは登場していないが、坊っちゃんにとって、非常に重要な人物である。しかしなぜ清は坊っちゃんをずっと可愛がっているのか、なぜ無鉄砲な坊っちゃんを受容するのかというと、理由は以下のように考えられる。

清は無学でありながら、もとは由緒のある人間だから、坊っちゃんの内面的な美を本能的に直感的に捉えていた。坊っちゃんは四国に行く前、清を訪ねに行った時、次のように語っている。

只清は昔風の女だから、自分とおれの関係を封建時代の様に考へて居た。自分の主人なら甥の為に主人に相違ないと合点したものらしい。（『漱石全集』 第二章）

冒頭の章においても、「あなたが御うちを持って、奥さまを御貰ひになるまでは」と清は語っている。以上の内容からすると、坊っちゃん的心情においては、清と彼との関係が主従関係としてとらえられていることが分かる。清の側からすると、坊っちゃんは家族のような存在であると言えよう。清は時々嬉しそうに坊っちゃんの顔を眺めながら、「あなたは真っ直ぐでよい御気性だ」、「あなたは欲が少なくって、心が綺麗だ」と坊っちゃんを褒めている。人は正直で真っ直ぐであれば、必ず立身出世できると固く信じている清は、自分の愛をすべて坊っちゃんに与えたのである。坊っちゃんが兄と喧嘩をし、父親が「おれを勘当する」と言い出した時にも、清は泣きながら父親にあやまっている。父親に見捨てられた坊っちゃんは、一方では、一貫して清には受容されていた。清の愛は母親が自分の子どもに与えるような純一な愛とも言えよう。

無鉄砲な坊っちゃんを受容し、無償の愛を注ぐ清は、坊っちゃんの成長の過程で不可欠な存在であると考えられる。清の愛情に包み込まれている坊っちゃんは、生みの母に求められなかった心の支えを清から得て、それを大切にしている。実は清は小説の始めと終わりにしか登場していないが、坊っちゃんの語る内容にはよく出てくる。どのような事が起こっても、誰に会っても、まず心の中に浮かんでくるのは清の姿だという点から見れば、清が坊っちゃんの心において如何に重要な位置を占めていたかが分かるはずである。また、彼は四国の中学校を辞職し、東京に戻ったら、すぐ清の居るところに飛び込んでいるという点から見ると、清の坊っちゃんに対する受容のあり様は大切である。換言すれば、清の受容は坊っちゃんの人生において、重要な役割を果たしている。彼が一番困っている時には、清は彼を安心させる存在である。

坊っちゃんにおいて、清の信頼と無償の愛は彼にとって重要な意義がある。どれほど落ち込んでも、坊っちゃんは自己肯定的である。持って生まれた気質に加え、清の愛情を得たからこそ、坊っちゃんは正義感を貫く向日性を持った人間になったのだと言える。坊っちゃん自身も、四国での孤独な生活の中で、子どもの頃から何度も褒めてくれた清の言葉、具体的には「あなたは真っ直ぐでよい御気性だ」という言葉が心の支えになっていると思われる。清の存在は彼の人生のある段階を幸せにしている。すなわち、坊っちゃんの運命は全般的な〈悲劇〉ではないのである。清はとても魅力的な人物だと考えられる。坊っちゃん「損ばかりしている」が、それでも自分のありかたを変えなかった。それは、その特有の「ありかた」を受け止め、認め、愛してくれた清の存在のお陰であると言えよう。清の受容こそが、坊っちゃんの「真っ直ぐ」な有り様を貫くことを可能にさせたのである。そしてそれこそが、この小説において、対立と受容の構造の中で坊っちゃん像が語られることの意味であり、清の受容の姿勢が、愛すべき坊っちゃん像の提示へと結実していると結論付けることができる。

## 終章

本稿では作品の主人公坊っちゃんを中心に、『坊っちゃん』というタイトルにこめられた二つの意味、彼の人物像、他の登場人物との対立関係、また下女の清における受容の面から、多角的に坊っちゃん像を分析し、清が彼の人生において、極めて重要な地位を占めていることを明らかにした。また本論文は、夏目漱石の『坊っちゃん』について「対立と受容の構造」を作品の枠組みとして見据え、その中で、新たな坊っちゃん像を提示しようとしている。本稿においては、作品の主人公坊っちゃんを中心に、「坊っちゃん」というタイトルにこめられた二重の意味と対応させていく形でそれぞれ「対立」と「受容」の有り様を導きだした。

まず、タイトルの『坊っちゃん』については赤シャツや野だからすると、「坊っちゃん」は未熟者という意味を持つことを考察したが、一方で、坊っちゃんを可愛がる清からすると、「坊っちゃん」は愛情を込めた愛称であることを明らかにした。坊っちゃんは赤シャツらと付き合う間に、単純な性格のため彼らに引き込まれようとしている。そして、卒業したばかりの坊っちゃんはまだ社会経験に乏しく、赤シャツの〈真意〉に思っていたことができず結果として孤立させられた状態になっている。坊っちゃんの無鉄砲で単純な性格は赤シャツらとの対立関係を形成する伏線となると考えられる。

また次に、坊っちゃんの性格、教師としての有り様と孤独感の三つの面をめぐって坊っちゃん像を究明した。坊っちゃんは強がりで癪癪持ち、「負け惜しみの強い男」である。無鉄砲なわりに、坊っちゃんは道徳的で強い正義感を持っている。田舎に対する反感と教育の現場の出来事の実分析を通して、坊っちゃんの教師としての有り様を明らかにした。また教育現場における理不尽さと闘う坊っちゃんの教師像を考察した。

そして、坊っちゃんと他の登場人物との対立関係を分析した。とりわけ『坊っちゃん』における闘争的会話による対立の有り様について論じた。家族との対立、四国の生徒たちとの対立、教員との対立など、様々な人間との対立意識で溢れている。この考察から、坊っちゃんの無鉄砲さと単純さが明らかになった。彼の善良さと正義感に溢れる人格も明確にした。また坊っちゃんと人々の対立関係は、この小説の中心線として一貫していることを明らかにした。

最後に、清という人物の分析を通して、彼女が坊っちゃんにとって、どのような重要性を持っているのかを探ってみた。清は坊っちゃんの家で「十年来召使っている」下女で、坊っちゃんを非常に可愛がってくれて、無条件の愛情を坊っちゃんに注いでいる。清の信頼と無償の愛、更には坊っちゃんへの全面的な受容があったからこそ、坊っちゃんの人生は総合的に悲劇にならないのである。本論は対立と受容の構造で坊っちゃん像を分析したが、清における受容の姿勢は、愛すべき坊っちゃん像の提示へと結実していると結論付けた。

注

注 1 関川夏央『『坊っちゃん』の時代』二葉社 二〇〇二年十一月 二頁

注 2 平岡敏夫「『坊っちゃん』試論―小日向の養源寺」『文学』一九七一年三月

注 3 中島国彦「坊っちゃんの「性分」、『坊っちゃん』の性格―一人称の機能をめぐって」『日本文学』武蔵野書院 一九七八年十一月 九頁

注 4 有光隆司「『坊っちゃん』の構造―悲劇の方法について」『国語と国文学』一九八二年八月 四八頁

注 5 小森陽一「裏表のある言葉―『坊っちゃん』における〈語り〉の構造」『日本文学』一九八三年四月 六二頁

注 6 斉藤英雄「『坊っちゃん』の世界―「譚」の内実」『漱石作品論集成』桜楓社 一九九〇年一二月

注 7 和田康一郎「「天誅」の成功―「坊っちゃん」論考のための覚書」イミタチオ（16）一九九一年二月 三二頁

注 8 清水美知子「夏目漱石の小説にみる女中像…『吾輩は猫である』『坊っちゃん』を中心にして」『研究紀要』関西国際大学 二〇一四年三月 六四頁

注 9 西山松之助『江戸っ子』吉川弘文館 二〇〇六年五月 九二頁〜九三頁

注 10 寺崎昌男『教師像の展開』国土社 一九七三年二月 十頁

注 11 『日本国語大辞典 第二版 第八卷』株式会社 小学館 二〇〇一年三月二〇日 三〇七頁

注 12 注2に同じ。引用は『漱石作品論集成』桜楓社 一九九一年一月 二一頁

注 13 『日本国語大辞典 第二版 第三卷』株式会社 小学館 二〇〇一年三月二〇日 九二五頁

注 14 注12に同じ。一一頁

参考文献目録

テキスト

『漱石全集』第二巻 岩波書店 一九九四年一月

単行本

片岡良一 『夏目漱石の作品』 厚文社 一九五五年八月

夏目漱石 『文学談』 吾妻書房 一九五八年九月一日

神島二郎 『近代日本の精神構造』 岩波書店 一九六一年二月

北垣隆一 『改稿漱石の精神分析』 北沢書店 一九六八年十一月

土居健郎 『漱石文学における『甘え』の研究』 角川書店 一九七二年九月

三好行雄 『日本近代文学研究必携』 学燈社 一九七七年一月

瀬沼茂樹 『夏目漱石』 東京大学出版会 一九七八年五月

江藤 淳 『夏目漱石』 新潮社 一九七九年七月

清水孝一 『夏目漱石の全小説を読む』 学燈社 一九九四年七月

長谷川泉 『近代日本文学思潮史』 译林出版社 一九九五年七月

木村直人 『漱石異説『坊っちゃん』見落』 武蔵野書房 一九九八年七月

江藤淳 『漱石とその時代』 新潮社 一九九九年二月一日

王之英 『日本近代文学賞析』 南开大学出版社 二〇〇三年一月

夏目漱石 『坊っちゃん』 新潮社 二〇〇三年四月

川野純江 『『坊っちゃん』と『明暗』「腕力」の決断の物語』 鶴書院 二〇〇五年一月

一月

吉本隆明 『夏目漱石を読む』 ちくま文庫 二〇〇九年九月

小森陽一 『漱石を読み直す』 岩波書店 二〇一六年七月

単行本所収論文

相原和邦 「『坊っちゃん』論」 『漱石文学の研究―表現を軸として』 明治書院

一九八八年三月

和田康一郎 「「天誅」の成功―「坊っちゃん」論考のための覚書」 「イミタチオ」 (16)

『日本近代文学研究』 教文館 二〇〇二年二月

雑誌掲載論文

佐藤泰正 「『坊っちゃん』の世界―諸家の論にふれつつ―」 『国文学研究』 9

勉強出版 一九七三年十一月

清水美知子「夏目漱石の小説にみる女中像」『吾輩は猫である』『坊っちゃん』  
を中心にして』『研究紀要』 関西国際大学 二〇一四年三月

## 事典

今西幹一 佐藤裕子 増田裕美子 増満圭子 山口直孝編『『坊っちゃん』事典』勉強  
出版 二〇一四年十月